

川柳の雑詩

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

八月号

Nojirc.

No. 459



川柳雑誌社主催

会句悼追郎路

恩師路郎先生を偲んで思い出をこころゆくまで句箋におのせ下さい。
一人でも多くお誘い合せに出席下さい。

日時 八月六日(金)午後六時
会場 自安寺(211)一四七八番

兼題「旅」(三句) 麻生 葭乃選

「煙草」(三句) 中島生々庵選

「盃」(三句) 北川 春巢選

「ひとすじ」(三句) 若本多久志選

席題 二題(当日発表)

レコード 在りし日の路郎先生のお声をお聞かせします

「恩師を偲んで」 川村 好一郎

会費 百五十円

幹事 摩天郎・いさむ・南宗・文秋・庸佑

・八郎・与呂志・清人・すすむ・薫

風・柳宏子・舟遊

★投句だけの方は郵券五十円同封
(八月五日着便)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪 6081

大 阪
戎 橋
北極星直営営業所



戎橋	北極星	三三七
白浜温泉	やわらぎ	三三七
大正橋	やわらぎ	三二六
永楽橋	やわらぎ	三二六
野田阪神	やわらぎ	三二六
野田阪神	パンヤの食堂	三二六
くまた町	パンヤの食堂	三二六

あなたの句帖として

ご利用あれ

★路郎好みだけに、すばらしく気がきいて
います。句会でお使いになるなり、抜けた句
の整理にお使いになれば、何冊かで、あなた
の句集の礎稿が出来ます。又柳友への贈答に
句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。

一冊八〇円(送料二〇円)

大阪市住吉区万代西五丁目二五

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪(六)6081

振替口座 大阪七五〇五〇

うらわ
瓜破のかまどへこそは入りにけり
霹靂の火もシユンとなり 雨続く
旅いくひ 波調のあわぬ地をさして
さらば さらば まだ私は夢を見てます

麻生 葎乃



柳 粹院 釈路郎

川柳雑誌★八月号目次

追悼吟	題字：麻生路郎・表紙：野尻弘	麻生葎乃	(3)
大陸放浪 皇帝最後の日	東野大八	(26)	
人問	麻生葎乃	(31)	
川傍柳初編研究(二九)	丸十府・岡田甫 川端柳風・高須嘸三味・前田喜代人 岡崎重義・清博美・藤井和雄	(12)	
恩師路郎先生を偲んで	北川春巢	(4)	
「西成界わい」を結ぶに臨んで	魚住満潮	(19)	
毒葉考	那谷光郎	(16)	
明治川柳と風俗	奥津啓一朗	(31)	
信貴に遊ぶ	文秋記	(25)	
柳志の句について	清水白柳	(34)	
初代川柳と同時代の前句附について	八木摩天郎	(19)	
アイデアとはこんなもの	河村日満	(40)	
上方の前句附と川柳点	阿達義雄	(32)	
大万川柳について	松江梅里	(40)	
川柳塔	麻生葎乃	(6)	
同舟近詠	諸家	(11)	
近作柳樽	川村好郎	(20)	
方円帖	北川春巢	(28)	
金泥集	麻生葎乃	(39)	
各地柳壇		(41)	
★柳界展望		(38)	
一路集「返濟」	尼緑之助	選	
「イミテーション」	西森花村	選	
「レベル」	小西雄々	選	
★柳構室	葎乃・宏子	(46)	

題字：麻生路郎・表紙：野尻弘



恩師路郎先生を

偲んで

北川 春 巢

昭和四十年七月七日午後九時半過ぎ、電話が鳴り響いて、路郎先生のご逝去を知らされた。この悲報は一瞬、私の耳に富士山が崩れた音に聞えた。

路郎先生は実に現柳界の富士山であった。その富士山がこの瞬間において崩れ去ってしまったのである。富士山といえば日本の象徴として全世界に知れ渡っている山だが、それを見る人々によって色々に描かれている。古くは広重の東海道五十三次の富士山あり、北斎の富嶽三十六景、裏富士十景あり、新しくは岡田光陽の写真ありという具合である。路郎先生の全面を私のペン如きで描き尽くせるものではないことは、富士山の絵や写真がいくらあっても、まだ富士の全貌ではないのと同じである。この貴重な紙面を借りて、私の頭にある路郎先生の思い出を書き、受けたご恩の一端でも報じたいと思う。

私をはじめ先生にお目にかかったのは、忘れもせぬ、阪大川柳会にはじめて出席した昭和十二年五月であった。丁度二十八年前であるから逆算すれば先生のお年は当時四十九才、今の私よりも少しお若かったわけである。阪大恵済団の小会議室で、コの字型に配置されたテーブルの椅子席であった。先生は正面の椅子に座られ、それに次いで故長崎柳秀先生、故笠原路生先生、故石崎洗塵先生、故尾崎方正先生、現阪大名誉教授布施筑川先生、現大阪警察病院長井上湧三先生その他「大川端」に名を並べておられる方々が、文字通り綺羅星の如く居並んでおられた。「大川端」は阪大川柳会創立五周年記念に昭和十年発刊された句集の名前である。私は入会の記念として同書を一冊頂き、現在も愛蔵している。当時の阪大川柳会のメンバーで今も川柳を続けておられるのは、佐野栄こと西尾

栗氏ただ一人だけである。先生はお髪もお髭も黒々として、川柳家というよりは、居並ぶ医学博士の上に「大」の字をつけて、「大博士」と呼びたいご風貌であった。その時抜いて頂いた句も忘れはしないが、柳秀、路生などの大教授の、句が抜けた時の子供のようなお喜びの様子も忘れることができない。阪大川柳会の句は、その後も「川柳雑誌」の各地柳壇欄で発表されていた。

路郎先生のご選句ぶりは、当時も最近も変わらず、コップのおチャケを黙々と飲みながらの選である。添削ということとはされなかった。質問があれば答えられたが、時に三才の句の批評をされることもあった。しかし三才を抜くということがすでに批評である、というようなこともおっしゃっていた。

私が「川柳雑誌」を知ったのは、大学二年生（昭和九年）の十二月で、長崎柳秀教授の試験（薬理学）の後であった。柳秀教授が川柳の大家であることは学生間にも有名で、もし試験問題が分からぬ場合は、（試験は面接口答試験であったから）川柳を一句いえば合格させてもらえる、という伝説さえあった。幸い私は川柳をいわずに合格させてもらったのであるが、試験が終

つてからはじめて教授室を訪れて川柳のお話を伺った。その後もひまを見付けてはお部屋へ伺って、川柳のお話を聞いたのであったが、その頃から路郎先生のことでも阪大川柳会のことでも予備知識は受けていた。柳秀先生はご在室の時には、嫌なお顔もされずに、一学生の私に会って下さって、句会で抜けた句、殊に三才に入選された句のことを得々と話して下さいました。「卒業したら阪大川柳会へ入れてやるが、学生の間は駄目だ」ともおっしゃった。しかし路郎先生のことはその頃から承っており、はじめて拝顔の栄を得て紹介された時も、はじめてのような気はしなかった。

路郎先生のご選句ぶりは、当時も最近も変わらず、コップのおチャケを黙々と飲みながらの選である。添削ということとはされなかった。質問があれば答えられたが、時に三才の句の批評をされることもあった。しかし三才を抜くということがすでに批評である、というようなこともおっしゃっていた。

日に大学へ行ってみると、警報が出て会は流会になるようなことがよくあった。

私は大東亜戦争になってから、滋賀県貴生川町に疎開し、戦後大阪へ帰って来たが、その後私の播いた川柳の種が貴生川町で芽を出したというのか、貴生川に句会ができた。私は句会の日には大阪から出席した。「是非路郎先生にも出席して頂きたい」との貴生川町当局の希望があり、私がお願いすると、先生はご夫妻で貴生川の句会に出席して下さい。弟子の私の言を入れて下さった有難いお心である。あの日の汽車の超満員ぶりが忘れられない。私が兵庫東高砂の鉄道病院長をしていた頃、高砂でも句会が盛んであったが、ある時の大会に先生をご招待すると、はるばる西下して下さった。弟子を引き立ててやろうとの有難いお心であったとこれも感謝している。

それに引きかえ、私の方は先生に対してどうであらうか。先生のお心を休し、できる限り先生のおことばに従ったつもりではある。中島生々庵氏ご病氣中のある期間は、先生のご命令で不朽洞会理事長をやらされ、また生々庵副主幹の後では、副主幹にもしてもらった。それにしても理事長としても、副主幹としても、何ひとつ先生のご期待に添う仕事はできていない。慙愧に耐えぬ次第である。とりわけ私の心に残るのは、ひとつだけ先生のご命令に従えなかったことがある。おそまきながらここに記して先生のご霊に對しお詫びをしたいと思う。

それはもう半年以上も前の話であるが、

先生から「長崎柳秀先生について何か書け」というご命令を受けたのである。柳秀先生は戦争中爆撃でなくなったのだが、先生のことは私が一番よく知っていると思われていることであらう。しかし書くかと思えばやはり句を拾い出さねばならぬ。私の身辺の事情で、近頃は何かと雑用が多くなり、句を探すひまがないのである。「そのうちに書きます、書きます。」といひながらとうとう書かずに今日に至ったことである。今思えば「何か」書いて、先生のご生前に見て頂きたかったと後悔している。

なお最後に先生のご最期の様子を記しておくことも私の義務だと思うので一筆したい。

七月四日、日曜日の朝、葎乃奥様から電話があって、「二、三日来、先生の食欲が全くないのでどうしたものだろう」とのお言葉である。「ブドー糖の注射でもしましょう」と電話を切り、ブドー糖やらビタミンB₁、ビタミンの注射を持ってお宅へ駆けつけた。行ってみると日赤病院の若林先生へもお宅へ電話をされた由で、それにビタミンB₂も加入するように、との処方だった。B₂を持参しなかったのは私の迂闊だった。葎乃奥様が薬局へ買いに走って下さった。その留守のことである。私は鄭重に先生のお脈を見、血圧を測った。脈搏一分間七二、整、実、中。血圧は最高一三〇最低七〇。平素と余り変った所はない。お顔や皮膚にはやはり肝炎の特徴である黄疸があった。また皮膚はじつとりと汗ばんでおられた。お髪やお髭は（平素句会に出ら

れる方はご承知のように）真白だが、きれいに手入れされていた。不精髭などもなく、黄疸さえなければ病人とは見えないのであった。奥様のお話では、便の色もよくなり、食欲も二、三日前までは比較的よくて、安心していたとのこと。食欲はともかくとして、現在のように水分も一滴も通らぬということは実に重大なことである。水分を補給できなければ、水分不足で早晩の運命は目に見えている。二〇ミリリットルぐらいのブドー糖注射では意味をなさぬのである。その証拠には先生の舌はカラカラに乾き切って、お話をされる時、物もいにくそうであった。そのいにくそうな口で、先生は「巻頭の句が辞世の句やで」とおっしゃった。巻頭の句というのは、七月号のか八月号のか、私には分からなかった。七月号はまだ出ていなかったし、八月号の編集も殆んどできている由であったから……。私は「辞世の句などとおっしゃるのはまだ早いですよ、まだまだ作句して頂かねばなりませんに……」と申し上げた。心なしか私の声は震えていた。先生が「死」を覚悟されたことをはつきり感じたからである。しかしこのおことばのことは、奥様には申し上げなかった。

ともかくなるべく水分を取って頂くように、といって注射後辞世したのであった。近所の医者を紹介してくれといわれたが、私にはお宅の近所に知り合いの医者はなかった。府立病院が近くにあって、院長も副院長もよく存じ上げているが、どうせ入院せよといわれるのにきまっている。入院してリンゲルでも注射していればまだまだ死なれずにおられたかも知れない。しかし日赤

病院をつい先日退院された先生である、入院を承知されるはずがなかったのだ。私は敗れて府立病院を紹介しなかった。幸い近くの帝塚山病院へ布施筑川先生が顧問として月曜日には来院される日である。「布施先生なら長い間大学教授をしておられたので、近所にお弟子さんがおられるかも知れません。明日ご相談されますように。」と申し上げておいた。

我ながら、今思えば悪かったと、取り返しのつかぬ気持ちでバイである。最後のページを借りて先生にお詫びを申し上げたい。

合掌

川柳雜誌社主幹川柳不朽洞会主宰麻生路郎儀葬式に際しましては御多忙中にも拘わりませず且つ遠路態々御会葬下され御鄭重なる御弔慰を賜わり格別の御香志に預り御芳情誠に有難く厚く御礼申し上げます。

早速拝趨御礼申上ぐべき筈の所何分取紛れて居りますので略儀乍ら誌上を以て御礼御挨拶申し上げます

昭和四十年七月十八日

大蔵市住吉区万代西五丁目二五

川柳雜誌社

川柳不朽洞会

副委員長 北川春巢

副委員長 若本多久志

副委員長 松江梅里

主 麻生アト

主 麻生葎乃



川柳塔

麻生 葭乃選

黒白は裁かれる身が知って居り

ハワイ 羽佐間柳葉

成功者過去の汚職を世は忘れ

超然としても居られぬ当こすり

面談の上と募集は気を持たせ

堺市 吉田圭井堂

倒産を知らず力んで来た税吏

袖の下取りつ放しで転動し

申し訳にちよびり逃す土用丑

目的へあと一キロで癲痺に遭い

倒産旋風

済まぬとも書かずシャッター降りたまま

防府市 長野井蛙

金貯めて風の音にも耳を立て

潤れ果てた涙は過去をふり向かず

頼りない世の中両道かけて生き

岡山県 直原七面山

女の肩を叩いて愛を督促し

ウインドの水着に恋を夢みる娘

おしゃべりがいてご近所がもめつけ

鳥取市 河村日満

植樹祭に両陛下を迎えて

奉迎へ右翼のマイク指図めき

八尾市 西尾 栄

藤椅子のおく位置があり海が見え

滝を背に逆光線もやむを得ず

展望台落人部落夕餉らし

灯取虫客も扇子でうちそこね

大阪市 市場没食子

日本平にて

日本平こゝから薄陽射した旅

伊豆大島にて(二句)

乗って撮る為の馬代五拾円

御神火へ渡る船でも僕は酔い

西宮市 若本多久志

ブラームスでバタくさい子に育ち

茲四五年映画も見てず古稀近し

大阪市 正本水客

おそまつでしたとガイドの唄おわる

肩を打つ湯滝瀬音が消えていた

離陸の爆音そう快に視界から消える

高槻市 若柳潮花

断った日から憎しみだけを書き

女の弱さ捨身の化粧して

くせのあるブザーが鳴らぬ日をかぞえ

兵庫県 小西無鬼

手をつくし最後お灸が効いたとか

全国区連呼で素通りしたまんま

大阪府 西いわを

お嬢さん不利な話へ坐を離し

役所空っぽ見送りに行ったらし

縁談を逃がした話派手にする

大阪市 北川春巢

笛吹いてバスのガイドも楽しそう

巨神戦辞引すかたんばかり引き

ホステスに合話す話が間延びして

月月火水木金と服替えて勤める身

大阪市 後藤梅志

信貴・生駒吟行

精進の悪いのが居る霧のバス

信仰をなくし疑がいぶかなり



御ン下車へ屏観音開きなり

バンザイが陛下を波の如く追う

徳島市 足立 春雄

単線は忘れた頃に動き出し

葉桜をお茶の肴に共白髪

貫録は上座にいるを意識せず

中座して心の残る妓を思い

倉敷市 木村 千容

柄になきことは一切おあずけよ

結石のため入院

老いらくのベッド竝べて入れてあり

大安をえらび共々退院す

倉敷市 田垣 方大

電工は西部の男のような腰

監督は何やらわめいている現場

鉄柱が動いてゆくよう雲が飛ぶ

石川県 野村 味平

分の悪いことは無口で押し通し

ブン屋かとスタンドバーであしらわれ

マスコミが書いてのれんに箔がつき

学歴を言われ雑役おさまる気

大阪市 木村 水洞

選挙戦次の世代も頼りなく

平でいるおかげでお世辞下手ですみ

心では気になる妻の更年期

米子市 小西 雄々

服装とアンバランスな家に住み

老舗まで多角経営して稼ぎ

メーデーへ歩き疲れる齢を知り

保険屋が隣りの頓死を言いに来る

ニコヨンの飼う犬にまで吠えつかれ

大阪市 山川 阿茶

雀友の死

招集の電話とどこかぬとこへゆき

橋筋に心ブラ古稀の眼にも毒

ブルトーザまだ山もあり丘もあり

俯瞰図が変って淋し揚雲雀

お猿さえ小さい檻ではノイローゼ

大阪市 金井 文秋

母の愛確かささと母と去ぬ

二つ頼めば一つ忘れる人を知り

持ちネタがあるのか祝辞馴れている

体位向上囁居は頭打つところ

加賀市 那谷 光郎

女たばこ輪に吹く時は天の邪鬼

月賦月賦貧乏してもデラックス

朝酒も責めまい孤独な父でいる

大阪市 福井 野迷路

真実を述べたら税務吏顔をあげ

唾のんでよくよく見れば蠟細工

下関市 桜川 不水

一万円そう落付いて飲めないぞ

問題の金も絡んでダムが出来

おむつ干す目と目が笑う十時半

岡山県 浜田 久米雄

鎌の刃を折って山火事から帰る

家内中平和猫まで来て座り

台所改善うちにはうちで決め

出雲市 尼緑 之助

四国路の旅

霧こめて屋島の古事をつなぐ夢

石松の話しばらく登る坂

鷺羽山にて

鷺羽山ガイドの居ない景に立ち

頂上の眺めビールのない不足

大阪市 水谷 竹荘

枕カバーかけて女中は引下り

なれてます浮気されたを気にもせず

京都市 大鶴 喜由



年寄りが若く歩けば疲れが出

門真市 福島鉄児

特売場レチャー気分の主婦もおり

妓から見れば男は飴のよう

席談る意志なし臉としたまま

岡山市 服部十九平

尾頭へ箸も朱塗りにして祝い

お断りしますと火箸グツと刺し

西宮市 若林草右

倒産で去年のストを噛みしめる

食卓のバターの伸びも春めきて

カナリヤもはこべですます野菜高

岡山県 田村藤波

温泉の情趣真昼のチョイナ節

悪党ではない全盲のサンガラス

児島市 本田恵二朗

兄急逝

ユーモアをもうとばさない人となり

頼らない主義死ぬ時も死ぬ時も

京都市 松川杜的

裾押える所作六十の老婆にも

生きてゐる証拠ネオンが明滅す

尼の集団エネルギーシユな顔も混り

母子妻と俺三つ巴えの派閥

鳥取市 森本法泉子

大井川裸でわたる川でなし

富士だ富士だとはかのものは見ず

名山もやがて車窓の後に消え

堺市 高崎雄声

春や春犬も欠伸をしてござる

遊ぶのもせわし日めくり繰っている

人生の門出幼稚園泣いて行く

島根県 藤井明朗

車中もうワイングラスが待ちきれず

初孫出産

飲んで寝るばかり初孫無表情

倉敷市 野田素身郎

客でもなけりや養子ビールにありつけず

結婚して辞表をすぐ書く癖がやみ

退校処分をうけた母校へ赴任をし

芦屋市 丸川初甫

防犯灯つけて小金に縁がなし

桂離宮拝観

飛石のゆきつくところ手水鉢

嵐山

桂川友禅流しの色になり

唐津市 新岡回天子

古物屋の商品今日は仏様

市長市議呼びすてにして要保護者

岡山県 池田古心

親の見栄嫌やがる塾に通わせる

大阪府 早川清生

庭に花あって花屋へくる夫人

小学唱歌家族に思い出みな違う

屋台で飲んで貧しさを肴とす

日々疲れ貧しきドラマ見るは厭

大阪市 西出一栄

永平寺参拝

永平寺僧の教えた拝み方

小学校のクラス会(二句)

五十年振りの顔を持ち寄るクラス会

こうつとと自分の齢を忘れかけ

みやげものいずこも同じものながら

大阪市 児島与呂志

物価高大臣何を云わんとす

新入社母の口紅うすくひく

選挙戦忘却の師の推薦状

大阪市 橘高薫風

灯台の在り風浪の中なる蘭

ルンペンに王侯の鬚詩人の眼

猫憎くし女中の仕打ち告げにゆく

鳥とキリスト首垂るる全き死



米子市 石坂新雪

神様のお蔭おみきの名でつがれ

吸いがらを蜂のとどめにのせてやる

糸をくるだけの余生もある女

大阪市 西川 晃

残り少ない毛にもヘアースプレー

老いらくの眼にまぶしくも女体跳ね

スラムの児すでに大人を吞んでいる

一票へ欲一すじのしやがれ声

鳥取県 田中蛙眠子

手鼻かむことも気がねな近代化

晩鐘の祈りも失せた近代化

頬かぶりまだ頑として牛を追う

神戸市 仲どんたく

断末魔の魚のあがきを生きが良い

呉にて

呉の酒場軍艦マーチで迎えられ

平田市 久家代仕男

保険では効かぬ治療の多すぎて

御行幸明治は勿体なく話し

大阪市 本多柳志

思い上りも程々にしたまえコマーションシャル

出雲市 原 独仙

生返事そうか編目を読んでいる

どこまでが限界女の夏姿

働いて貰う身深酒止めて欲し

窓口の順を黒眼鏡にゆずり

岡山市 江国幽谷

温泉へ来てまで部長と呼ぶつらさ

西宮市 樋口舟遊

一匹の鮎に斗争心がある

大股で歩く望郷に花が散る

民族が二つにはてしない戦火

新潟県 高野不二

あの時を笑うて地震一年目

オールドミスビールの消費量ふやし

大阪市 魚住満潮

続・西成界わい

けものめく顔で大盛めしを喰い

ヘリコプターか千円札でも撒いて呉れ

屋台四五軒まだ宵越の金があり

掴みあいの喧嘩同棲三日目を

炎天の下で山分する現金

立って喰ううどん跳足の子も交り

久し振りの笑い刑務所から父帰る

焼酎を腹に年長の街娼買う

どさ廻り裸身へテープ乱れ飛ぶ

愛媛県 村上旭童

買うといてから金策を考える

働いて貰わにゃというかたをもみ

地蔵さん今日は女とうつされる

高槻市 傍島静馬

商売不振おやじ現役復帰する

債権者会議で高いめしを食い

おれとこが倒産したい昨日今日

大阪市 河井庸佑

立ち直るチャンスへ又も金がいり

末席のその一言がひっかかり

大阪府 谷沢好祐

セットした髪満員の窓をしめ

嵐きぬ大樹は突っかえされたけど

合理化がそこに来てるに政治デモ

愛知県 槇 紫光

昔なら手打ちお城でデートする

便箋の裏まで書いて母の文

青森市 工藤甲吉

動物園で女房を思い子を思い

夕ざれば男にいとむ顔が出来

頼り甲斐なき亭主にて高軒

大阪市 今西章雅

教室も先着順と云う私大

女医さんは期待に反し手荒なり

あけすけにもの言うやとな座を沸かし

京都市 室井八九寸

台覧へ鶴匠の序列鶴の序列

乳と舌起きてて母児眠ってる

知らぬ徒に名無しの草とされて咲き

岡山県 横山 一声

活字で来た葉書はひまな時に読み

女連れ一人が買えば皆んな買い

全国区書きよい名前ないかいな

小松市 関戸宗太郎

みんな子に言わせて妻がふくれてる

まだオームみたいな孫に見送られ

船酔いで眼をとじたまゝ島巡り

美弥市 安平次弘道

社長の座がゆらぐ不況の策もなく

おどく〜と証言善人疑われ

愛媛県 渡辺 曉童

男の顔でいかりのみこむ

愚痴のねたをばさがすひま人

タイトの膝に三月の冷え

富田林市 浅川 八郎

どちらかが何か欠けてる春季スト

お祖父さんの部屋へ逃避して三才児

青森県 木村 凉人

旅浴衣うちのおむつと同じ柄

扶助料が俺の所得を上廻り

倉吉市 奥谷 弘朗

理想論ばかりならべて無頓着

富田林市 岩田 美代

子供と動物園にて

一夫多妻のオットセイには餌もやらず

錦蛇いやなら見るなど言うてる目

ハンドバッグいくつとれると鰐の背

ペンギンの胸のボリウムうらやまし

兵庫県 遠山 可住

なんぼ塗っても四十の肌

内職の妻の根気におそれ入り

兵庫県 河原みのる

死んだげなそうかいなアと俺もまた

セコハンは無理かと三女の肩に添え

鳥取県 清水 一保

独り咲き独り散りゆく野辺の花

出雲市 中川 晃男

パン食で中年太り押さえとき

金策つかず沈む太陽待っとくれ

松江市 柳 楽鶴丸

放浪二十年僕に根性たたき込み

一プラス一二になったり三になったり

京都市 都倉 求女

ハイウエイ同じ側ばかり陽が当り

立つぐらいいにヨイショと洩らす僕になり

ネクタイを妻が見立てて歳を知る

兵庫県 大江 秋月

肩叩く数も子供のアルバイト

スタミナをラッシュユが今日もすり減らし

寺の塀ブロック積みとなり下がり

今治市 越智 一水

除虫菊植えて政治へうとい島

紫陽花に似て信念のない男

小包が届いて母の日母は知り

竹原市 山内 静水

大阪弁へ飲まないはずの妻が受け

オールドミスだれにやる気か家を建て

大阪市 森川 すみれ

愛に背を向けて一人の道を行く

人生の終焉ドラム鳴り終る

新居浜市 小林 孝正

この辺で夫が折れとく妻のヒス

幹部だけ喋って職場会終る

借る目当つきハンドルの軽いこと

熊本県 有働 芝仙

算盤の同じところで眠くなり



忘られた歌手さいはての灯で稼ぎ

大阪市 賀本 昇

百姓の跡目は継がぬ赤いシャツ

絶景へ地の利を占める峠茶屋

松方市 宮川 珠笑

観賞料払いたくなる美女と乗り

子に指摘された絵本の読み遣え

京都府 西村 句楽坊

仏堂を降れば庫裡は火の車

同舟近詠

おとといの社会記事祖母おぼえてる

東京府 富士野 鞍馬

毎日の外出こけなんだ喜び

老人は福祉の公平でないぐちを言い

子があれば遺言も考える年

大阪市 橋本 緑雨

紫陽花の見ている窓の衣替え

旅のよき知るものぞ知る朝の酒

松山市 月原 宵明

町へ出て今日の命があやしかり

富田林市 吉岡 美房

お邪魔します刑事事ほんとに邪魔がられ

かげ口が結ばれ社報の美辞麗句

一城の主の顔の署長室

サロンパス皮をはぐよなめくりよう

諫早市 島田 破竹

あたま金それも他人の金をつぎ

ポナナスをサツと吸い取る家が建ち

入智恵が問い詰められて言いよどみ

その道の理屈女将に言い負ける

もめごとへ顔役そろばんすぐはじき

名古屋市 長谷川 鮮山

あてつけるようにこつんと置くコップ

映画いま手錠をかけたところで幕

社の寮をうまく使ってハネムーン

親子程そんなに違い仲が良し

和歌山市 秋月 宏方

働こう再び来ないきょうの日だ

黙秘権守り続けてひき蛙

レットルを信じなさいと花の種

待ちぼうけ行き来の車見るばかり

伺お中暑

川柳不朽洞会常任理事

若本多久志

西宮市津門西口町五〇

北川春巢

大阪市旭区大宮西之町
八丁目五七

西尾 栞

八尾市八尾木八一七

川村好郎

大阪府泉北郡高石町北
四六五

松江梅里

大阪府阿倍野区松崎町
三ノ一〇

清水白柳

大阪府南河内郡美原町
丹上四〇四

菊沢小松園

大阪市阿倍野区王子町
三ノ三四

小川恒明

大阪市東住吉区田辺東
之町七ノ三三

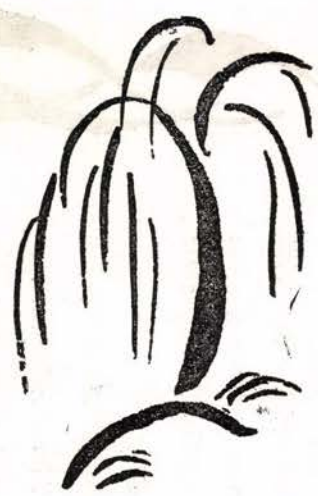
八木摩天郎

堺市九間町東二丁九

傍島静馬

高槻市藤の里三四

川傍柳初篇研究 (二九)



丸十府 高須啞三味
岡田甫 前田喜代人
川端柳風 藤井和雄
清博美

360 小づらもにういが大づらもにうい也
水砥

前田「小づら」はやや憎い。「大づら」は大きなつら(大変)いばった面構えを憎態に使う言葉で、どちらも同趣向である。意はあきらか。「小づら」の句は、他に少しみられるが「大づら」という句は、見出し得ない。

岡崎「小づら」の小は、憎む・軽い侮りなどの意をあらわす接頭語で「こづら憎い」とか「男というものは小面のにくい」(三馬・浮世風呂)などと使う。この「小づら」の対語として並べた「大づら」は、「大きな顔をするな」などという場合のことだろうが、「大づら」とは、この句の勝手な造語ではなからうか?

藤井「一寸憎いが、よくよく考えれば、心から憎い。」
川端「姑・小姑を詠んだ句と思う。」
高須「『小面憎い』という言葉があるが『大面だつて憎らしい』と言った句で、小に大を対照させた句である、ことに議論は

ないが、サデどんな場面と見るべきか、それが問題である。

所で、「大面」という言葉も、決してこの水砥の造語ではない。「その大面を下げてはゆるは」(狂言・二千石)などと使われていて、一般には「傲慢な様子」として通用している。

丸十持参嫁の句と思う。「大面」はもちろん「小面」に对照させた語だが、この嫁の並みはずれた醜い大顔にもかけたものであらう。

岡田「お妾あたりか?」

361 角田川よき泊り家の候なり

秋紅

前田「角田川」は隅田川で、遊里の吉原や芳町にそっている。「よき泊り家の候」は「よき泊りの候」と同趣向。「よき泊りの候ぞ隅田を越し」で、吉原泊まりの句がある。「よき泊り家」といった句は

よき泊り家の候と高輪で言ひ(タル六)があり、これは謡曲「鉢木」の詞句から来ている。「留め申したく候へども、是よ

り十八町あなたに、山本の里とて、よき泊りの候」とある。言葉だけの句である。

岡崎「賛。文句取りによる吉原諧美。」

高須「礎稿引用句の『高輪で言ひ』は、品川宿のことを言っているのだから、この『よき泊り家』は『遊女屋』のことで、誠に心地よき泊まり家であつたらう。」

丸十賛。

岡田「同。」

362 あれが椎の木屋敷だと下座見い、眠狐

前田「『首尾の松』の反対側の椎の太木が、猪牙での遊客のよい眺めであつたことは、既に出た。この屋敷を『椎の木屋敷』と言ひ、肥前平戸の藩主、六万三千石、松浦豊後守の邸であつた。

「下座見」(ゲザミ)とは、城門の番所、大名の屋敷の門番所等にいた足軽の中の長の役目で、諸大名が登城する毎に、その氏名を呼びあげる。従つて、家紋、行列、駕等の特徴をよく知っている。この句、猪牙舟でのものではなく、登城し

て来た松浦侯を見て「あれは椎の木屋敷だ」と洒落て言つたものである。

岡崎「賛。ただし椎の木屋敷の松浦侯は肥前平戸、六万三千石の豊後守ではなく、それから分家して平戸新田に一万石を領した大和守で、その上屋敷が、いわゆる椎の木屋敷といわれ、本所石原椎木にあつたのである。――なお、川柳殿様として有名な静山公(肥前平戸の松浦侯)には浅草鳥越(上)牛島(中)本所(下)の各屋敷があつた。

清「賛。椎の木屋敷については、岡崎説が正しい。」

高須「本所石原の『椎の木屋敷』が、松浦大和守の上屋敷であつたことは、岡崎説通りだが、本所が東京市本所区であつた初期のころ、いま名古屋に在る伊志田孝三郎君(中川柳主幹)の御尊父が、その区長をしていられたことは(余計ごとながら)余り知られていないようだ。

丸十句解は礎稿よし。

岡田「同。」

363 老人ものゝん死をしたで嘗られる

五丸

前田「『老人もの』は独身者、家族のないもの。『とん死』は頓死、急病で突然死ぬこと。ひとり者や食客(居候)はやっぱり者扱いである。それで、独身者がコロリと死んだ、というので、ヤレヤレの感じて、言葉だけで褒められる、という句で、『ひとり者』と『とん死』との常識的な組合わせにすぎない句。

一人ものかみさんたちにながられる (タル一二)

ひとりもの死んだ所が寺はなし

(タル一八)

一人ものやれ茶をくれろ火をくれろ

(タル一四)

ひとりものもちろんの事持仏無し

(タル一四)

岡崎二ひとり者が水わずらいでもしようものなら、長屋中が大変な迷惑をする。それが、頓死だったので、とんだところで寝られるわけ。

藤井二賛。亭主は細君より先に死ぬのが幸福だ、と常々思っている。落語の「らくだ」の主人公を思い出す句。

川端二賛。お通夜が過ぎると、もう忘れられてしまう存在。

高須二諸説に賛。案外川柳家には多いのではないかな？ 死んだ品川陣居なんか、茂草の寺に、自分の建てた立派な墓がありながら、その墓へ入れてくれる人がなく、遺骨は未だに何処かに預けてあるとか聞く。——この句、古句に珍しく持ってまわらぬ素直な句で、好感がもてる。

丸二諸説に賛。

岡田二同。

364 小便を遣ってもらって女郎抱半

一 甫

前田二もてない遊客。小便がたまっていると、いとなみの感じがよく出ない。だから、小便をしてもらって、やっと女郎を抱くというところであらう。小便という言葉がありながら、下品にひびかず面白い。

岡崎二これは末番句ではない。吉原の昼見世風景である。昼見世の女郎は、割合いに暇なので、子供を借りて来て遊ばせたりした。しかし、大小便の世話までするほど親身ではないので、先ず小便はさせてもらっ

てから、借り子を抱くという句で、

笑ひなせと借りた子をあやす也

(タル一三)

どこまでも自分の退屈しのにすぎぬ。

清二岡崎説に賛。昼見世は、九ツ時(正午)から夕七ツ時(四時)までで、昼遊び

の客は、武家やお店者等で、比較的ヒマだった。そこで、遊女は子供と遊んだり、手紙(フミ)を書いたり、売卜者に手相など見せて、過ごした。

ひる見世はよく笑ふ子をかりにやり

(明元礼2)

わっちにも抱かせなさいとふみを置

(安二礼6)

手の筋を格子の外へ出してみせ

(安元天1)

高須二岡崎説に賛。

傾城は身ぶるいをした子にこりる(明和)を三面子先生も引いていられる。

おいらんがお食しなんしと守に言い

(筈一)

丸二賛。

岡田二同。

365 今こそいさめ笈摺を娠ハぬい

鼠 弓

前田二「いさめ」は勇め。「笈摺」は負い簞二竹細工の旅行用具入れ、転じて巡礼の着物の上に着るものをいう。すなわち、姑が廻国に出るというので、嫁が勇んで笈摺を縫う、という句で「今こそいさめ」が、よくきいていて面白い。

笈摺を縫い／＼嫁のつやをいひ

(拾一〇)

岡崎二賛。姑が出るのは、秩父三十三所観音の巡礼か？

清二「今こそ勇め」は、謡曲「鉢木」からの

文句取り。「喜びの眉を開きつつ、今こそ勇め、この馬にうち乗って……」

笈摺を嫁は笑顔で縫っている(タル六〇)

からすれば、姑が旅に出るのであらう。

藤井二笈摺は、巡礼の旅行用具だから、姑が巡礼に出るのであらう。

高須二笈摺というのは、確稿通り「負い簞」から転じて、その下へ着る「袖なし」で、巡礼用衣装であるから、諸説通りであるが、如何に文句取りとは言え、ここの言葉としては「今こそ勇め」は少し無理で、頂けない。

丸二賛。

岡田二同。

四月廿五日開

366 伊勢物語へ文をのせて干

鼠 弓

前田二「伊勢物語」は、平安朝物語中の一書で、よく知られている。この本を読んでいた人は、病人(ろうがい)で、まだ療養中であるか、すでに死亡したのか、いずれにしても、消毒のために、それを干している

るのであり、現代なら消毒薬をかけるところであるが、灸用のモグサを、その上にのせた、面白い句である。

岡崎二消毒のためとまで突っこまなくてもよいと思う。労働で死んだ人の、四火の灸の使い残り、湿気のきたモグサを、その病人が生前読んでいた「伊勢物語」の上に載せて干している。という、わびしさ、あわれさを詠んだ句である。

高須二この「伊勢物語」を愛読していた病人は、若い娘と見たい。それが、残ったモグサと共に干されているのは、はっきり消毒とは意識しなくても、干すという行為の奥には、やはり消毒の気持がある、という

のは、当時としてはローガイを一般に肺病と誤っていた、のであるから……。

丸二岡崎説賛。

岡田二同。

(22才)

367 そつちへいってなと女房金を出し

鼠 弓

岡崎二子供に座をはずさするために、小銭を持たせたのであらう。

清二賛。うるさく付きまとうので、仕事ができない。

藤井二「そつちへ行つてな」とは、財布の中のヘソクリの金額を知られたくない、意味と取れる。毎度のことだが、息子の要求額の最低線で済ませたい、母親の気持ではあるまいか。とすれば、前二代のは小学生

期、小生のは中高校生期という所だが。また、小生のだと、金を去らして、金を出す。両氏のだと、金をやって、子供を追い払うで、一寸違う。もう一つ、金が大金の場合、また違う意味にもとれる。すなわち「出す金」が、小判などだと、問題が起

こらぬよう、部外者などとは、その場から去らせる。銭でなく、金だから、小遣い銭などでなく、その方が正解かも知れぬ。

川端二前二代説に賛。この場合、金と銭の別に、こだわることはない、と思う。

高須二柳雨翁は「下がり取りか、それとも下女の尻でも持ち込んだセナアか？」と言っているのに対し、三面子先生は「どちらにしても名句」と言っている。それ

で、ボクも大人説をとる。この句の感じは子供に対してとはとれない。

前田二子供なら「女房」でなく「母親」であるべきだが「そつちへ行つてな」からは、子供への感じを受ける。しかし、いず

れにしても、何かのもめ事か、秘密を要する事柄が、金で解決できる場面、句は平担であるが、含みがあり、巧みである。

丸川小生は「亭主対女房」と解す。

岡田「女房」とあるのだから、丸先生の説が正解。亭主にヘンクリを出してやるのだが、持っている額を知られたくないので「そっちへ行ってな」と言ったので、この口調から、長屋あたりの夫婦のしがない生活の一面がうかがえて、なるほど小生も佳句と思う。

368 雨性な娘袖からふって出る

菅江

岡崎「雨性」とは、外出するとよく雨に逢う。「雨男」とか「雨女」と言われる人のことだが、この雨性の娘は、転びが得意の踊り子で、サッソウと出かけて、シッポリ濡れることであろう。という句

清江

藤井「振袖の袖と、降る雨とを掛けた句だが、この娘、男とシッポリ濡れるどころか、案外よく「袖に振る」かも知れぬ。踊り子と限定しなくとも、あの娘は雨性だから、男を「よくふる」でよいと思うが。要するに、振られた男の、負け惜しみ、と解しては如何。

川端「礎稿に賛。雨性だから男を振るのではなく、降られて、濡れる方であろう。

高須「袖からふって出る」の「から」にイヤな味があり、しかも作者が狂歌家なので、雨の「降る」と、袖を「振る」との狂句臭がブンと来て、頂きかねる句だ。

丸川礎稿に賛。

岡田「同。礎稿に、清説の「振袖」を寓意し、踊り子を示している。

369 かなしき哉や紅裏をとりかへる

鼠弓

岡崎「不幸があつて喪服の準備である。紅裏（もみうら）は、紅を女の衣服の裏地としたもので、べにて無地に染めた絹布。葬式などに、赤では着て行けぬので、取りかえるのである。「悲しき哉や」は、弔辞などの慣用語の文句取り。

清江「賛。若い後家が一人できる。

藤井「賛。喪服の裏は、白でなければならぬ。だからモミウラではまずい。普通の家庭にありそうな句で、面白い。

高須「かつては「慶」に使用した紅い裏を、こんどは「弔」に使うため、白に取りかえる。それで「悲しき哉や」とおいたので、軽い文句取りの程度と思う。

丸川死んだ娘の振袖の紅絹裏をとりかえて、天蓋を作る、という句で、「かなしき哉や」は、謡曲「羽衣」の文句取り。

岡田「小生は葬式でなく、夫に死なれた女、即ち後家になった女の悲哀、を詠んだ句と思う。

丸川なるほど、然らん。

370 逃こんだかむる跡から牽頭也

秋紅

岡崎「かむろは、吉原で遊女の雑用を勤める少女で、六、七歳から十三歳までで、十三歳になると厨子に入れ、十六歳になると新造に出され、やがて一かどの遊女になる。器量よしで、おちゃっぴいで、おしゃまで、楼内で皆から可愛がられた存在である。そのかむろが、遊客から無理じいに酒を吞まされ、別室に逃げ込んだので、あとから暫間が介抱に行った、のである。

にげたあと禿は酔ってたわいなし

(タル一四)

へし込んでくりやうと禿追ひ廻し

(タル四)

清「逃げる理由を、酒の無理じいと限定しなくてもよからう。とにかく、客の悪ふざけのために、かむろは逃げ出したのだ。

藤井「酒にしろ、悪ふざにしろ、禿にありそう。だから、客も面白がつてかまうし、禿はまたそれを意識して、わざと大騒ぎをする。私は、この句を、禿のコケツリと感じている。

川端「禿には、からかわれる句が多い。私は、この句を、太鼓持と禿とがふざけあっている句と見る。

高須「禿の所作としてありそうな句で、逃げて来た理由など、どうでもよからう。要は「逃げて来た禿の後から、暫間が追つて来た」というだけで、一つの景になつていようというもので

なぜ舌を出したと禿くすぐられ

(タル一)

太鼓持ち禿に爪をとれという

(タル七)

この二句は、柳・三両先生が示された類句である。

丸川同右。

岡田「高須説に賛。

371 小袖着て居るのがほんの涼也

秋紅

岡崎「この小袖は、吉原の紋曰「八朔」に遊女が着た白小袖で、残暑の旧八月一日に、わざわざ白無垢の綿入れ小袖を着たのを見て、却って「ほんの涼み也」と感じたのであろうか。もともと、着ている当の遊女や、着せてやって費用を背負い込んだ客の苦勞はともかく、見た目には、本当に涼しく映ったことであらう。

藤井「深水画く「夕涼」の美人画で、丸髻

が涼し気に見えるのは、あくまで見る人の視覚による。白い小袖も、涼しく見えるのは、第三者の視覚だけの問題で、それを「ほんの涼み也」と見ていた江戸は、よき時代であったと言えよう。

高須「ただ視覚の問題だけだろうか？ また通人ぶって、それを「ほんの涼みだ」と言ったのだろうか？ もう少し深いわけはないのだろうか？ とボクには疑問。

丸川「字面そのものは、よく判るのだが、さて何を詠んだのか、まさか「心頭滅却」の実演句とも受け取れぬ。小生も疑問。

岡田「旧八月一日の「八朔」に綿入着用とは、当の遊女は暑いのが、それが「ほんの涼みだ」というのは、高須氏の一説「通人ぶって」である。吉原礼讃、遊里至上主義の当らしい句。

372 やれ御物遠と御新造膝へとり

鯉丈

岡崎「子供連れの来客に、御無沙汰していた（御物遠「おものどお」の挨拶もソコンコに、連れて来た小児を膝に抱き取る、御新造のいたわりぶりを詠んだ句で、御新造とは、身分ある人の妻女、おかみさんと奥様の中間の格の呼称である。

藤井「上品な御新造の接客振りが、目に見えるような句。狂言「葉襖落」に「その後はおものとうにこそござれ」とある。膝へ取りは、やっぱり小児か？

高須「難解という程ではないが、何となく治定しかねる句が、この丁には多い。この句も、どうも子供を膝へ取った、とは思いたくないが、ほかに何とも思ひ及ばぬ。

前田「礎解に賛。含蓄性のある句。

丸川「高須説同様、落ち着かない。御物遠に「お待ち遠さま」の意があれば「わが子を

膝に取る」解も成り立つのだが、御物遠の
例句としては、手許には

お物遠御用立て候傘とかき(タル一四)

きりないので、治定しかねる。

岡田II礎稿に賛。「やれ御物遠」は、現代
語で言えば「マアずいぶん久しぶりだね
エ」に当たる。膝に取ったのは赤ん坊。即
ち、この訪問客の女は、妊娠・出産のため
外出できず、従って「御物遠」になったの
である。

373 ほろを見て女房ぞっとするとい、

一甫

岡崎IIどんなつまらぬ女性でも相手にして
情を通じる男を、俗に「ほろっ買」とい
うが、その連想で「ほろ」を見ただけで不
潔感に襲われ「ぞっとする」という女房
は、そういう浮気な亭主にさんざん泣かさ
れているのであろう。

藤井II礎稿は、一寸こじつけ過ぎるよう
だ。「ほろ」とは梵論または梵論師(ぼろ
んじ)のことで、乞食僧、虚無僧、被髪・破
衣に刀を帶し、諸方をまわり歩いて、殺伐
な振舞をした(広辞典)とあるから、この句
は、女房が虚無僧を見て、ぞっとするとい
うのではないだろうか?というの、この
女房の亭主に、何か虚無僧にねらわれるよ
うな「前歴」があるのではないか。

川端II不精者の居候が、汚れ物をまるめ
て、押入れにでも入れるか、部屋の隅にで
も置いてあるのを、女房が見つけて、きた
ながっている、というのではないか。

高須II礎解も、藤井解も、もってまわりす
ぎる。これは、やはり川端説ぐらいが、妥
当だと思う。「ぞっとする」という表現

は、よく女性の使う表現だから……。

前田II「ほろ」は、藤井説の虚無僧と解
し、亭主が仇を持っている関係から、それ
を見て、怖気をふるったと、とりたいた。礎
解では「ぞっと」がピンと来ない。

丸II藤井・前田説に賛。

岡田II虚無僧を、ボロとかボロンジとか言
った例は、この時代にはない。この句で
は、やはりボロっ切れであらう。だが、そ
の

「ゾツとする」場合の治定は、ちよつと困
難。川端説のような場合もあり得る。しか
し小生は、ボロがたまつたのを見て、これ
を繕わねばならぬか、と思うて(その苦勞
を考えただけでも)ゾツとする、という風
に解したい。即ち、高須説のように「ゾツ
とする」とは、女性のよく使うコトバだか
ら、である。

374 我力国の梅より権ハしやれたもの

鼠弓

岡崎II「我が国の梅」というのは、前九年
の役で、源頼義と戦って敗れ、京へ引かれ
て来た安倍宗任を、嘲笑しようとして、梅
の花を指さして、何という花かと問いか
けた公卿たちに、宗任が

我が国の梅の花とは見たれども

大宮人はいかがいふらん

と歌った、という故事、すなわち
やっぱり梅というさうで公家てれる

(タル二一)

と、山谷通いの猪牙舟の目印しになった
大川端の松浦家屋敷の名物「権の木」を対
照して、通人にはこっちの権の方が「洒落
たもの」だ、といった句で、対岸の首尾

の松と共に

我が国の梅よりしやれハ松と権(傍五)

という同想句もある。

高崎II安永九年(一七八〇)の大川端の
「権」をはめるのに、康平五年(一〇六
二)の京の「梅」を引き合いに出すとは、
ずいぶん持つて回ったものだが、そうい
う学術的な傾向が流行していたらしいから、
どうも仕方がない。

丸II賛。

岡田II同。

375 顔にあざニツ出来るおしい事

一甫

岡崎IIこの「あざ」は、女が元服して、眉
毛を剃り落とした跡である。人妻になる
と、眉を剃るのがならわしで、そのあとが
青くアザのように見える。それはそれで美
しくもあらうが「惜しい事」と惜しんでい
るのは、岡惚れしていたのに、とうとう及
ばなかった、落胆である。

清II「惜しい事」については、礎稿と一寸
違つたニュアンスを感じる。「いい娘だっ
たのに、とうとう結婚してしまつたか」と
いう、周囲の人達の心情を詠んだものと、
私はとりたいた。——出来ることなら、いつ
までもこの美しい花を、手折りたくなかつ
たものを、という気持である。

藤井II町内の小町娘がなくなつた、と考
えるか、手前だけ意中の人を失つた、と考
えるかだが、この「惜しい」という語から
はやはり清説をとりたいた。

高須II清説をもう少しフエンして、万人カ
ッコウの美女を「いつまでも娘でおきた
い」心理から「眉など落とさずとも」とい
う心理にまで及ぼしたい。

丸II賛。「あざニツ」で頂きかねる。

岡田II諸説に尽く。

(22ウ)

376 関取のこわくかけけるすずみ台

長笑

岡崎II自分の体重で、涼み台がつぶれはし
ないかと——。

高須II判りやすい古句で、誰にでもすぐお
ぼえられるが、それだけに平凡な駄句。

丸II賛。

岡田II同。

川傍柳初篇研究訂正

▼四五八号

10頁二段10行目「(王柳11)ハ」(玉柳

11)「

16行目「類句」ハ「題句」

11頁上段10行目「吉原へ向く」ハ「吉原

へ行く」

三段8行目「きの字屋の」ハ「きの字

屋は」

12頁上段2行目「どつと」ハ「どつひ

と」

品質優良

先カペン

TACHIRAWA PEN

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

大坂市東区富町一丁目十一番地

立川ペン先株式会社



毒藥考

那谷 光郎

今ここに毒にも薬にもならぬた
わ言を並べて作句のつれづれに、
読んでいただく、気分一転の役に
もなれば幸甚かと思ひます。

さて、今後月世界、否、宇宙旅

行が積立貯金で出来るようになって
ても、少量のクロレラで人間寿命
を全う出来るようになって、毒
と薬とは、永遠に人間世界から除
外されることはないだろうと思
う。これ程人間の身近かに歴史と
共に存在するものは又とない。且
つ毒と薬とは紙一重と昔から言わ
れるが、特に毒に関しては、探偵
小説やドラマに、趣向をこらして
登場して来る、善玉悪玉が読者や
観視者をワクワクさせて来たこと
を思うと、何と感慨深いものがあ
ることであろう。

又本来の毒から離れて面白いこ
とに目の毒、気の毒、毒舌、
毒婦、など我々生活のあらゆる面
に渡って使われる言葉もある。

古代からの歴史

ではいつ頃から薬や毒が出来始
めたのだろうか、記録によると紀
元前二六〇〇年頃に既に薬が出来
ていた事が明かである。

古代バビロニア人が、僧侶兼医
師と言った人により、粘土板に調
剤法や呪文を記録して、これで人
間を病氣と悪魔から救わんとした
のが始まりで、これが隊商によって
エジプト→アラビア→印度などに
伝わったが、もうこの頃には阿片
が用いられていたらしいと言うこ
とだ。又紀元前一五五〇年頃には
水草の髄をうすくはいで圧したパ
ピルス（ペーパーの始り）に記
録された処方、約八百種、薬は
七百種以上もあり、毒薬としては
阿片、コルヒクム、マンダラ等が
記されている。

紀元前五〇〇年のギリシャ時代
になると大分進歩して、神秘ウエ
ルを除き科学的、合理的に考える

ようになり、所謂ヘレニズム文化
の花を咲かせたが、この時代は医
聖ヒポクラテスに依って代表され
るが、薬の種類や処方とは殆どエジ
プトのバピルスの域を脱し得な
かったらしい。

紀元前四〇〇年のアレクサンド
リア時代になると、ユークリッド
やアルキメデスの数学と共に医薬
特に毒物学が急に発達したよう
である。この訳は当時権力者の間に
毒殺が流行し王位にあるものは自
己保身のために色々と対策に頭を
悩まし、全知能を集めてその手段
予防解毒法などの研究を盛にやら
せたからである。有名な話は紀元
前一〇〇年に小アジアポントスの
国王ミトリダテスで、護身のため
の毒物研究には特に熱心で、罪
人や奴隷を使い毒物を服用させた
後で、解毒薬を与えその効果を試
験したりした。又自分自身でも色
々な毒物を少量宛服用して、普通

の毒殺の場合の量に耐えられるよ
う身体を鍛えた。この頃の毒物に
はヒヨス葉、毒人參、トワカブト
等が主として用いられたと言う。
この研究は後世、解毒薬をミトリ
ダチオンと言う程有名である。

（万能解毒剤）これは五十四種も
の薬物を含めた複合剤で、多少処
方の変遷はあっても中世紀に到る
迄解毒剤のモデルになっていたの
である。然しこの反面こんな話が
伝えられている。即ち彼がローマ
の勇将ボレーに攻め落された
時、もう絶望と先ず妻妾を毒殺
し、自らも毒を仰いだが、毒に耐
性になった身だから死に切れず部
下をして槍で突かせたと言う。又
ギリシャでも罪人にコニクム草の
煎汁を飲ませ、寺院の祕密をもら
した者にエジプトでは桃仁から得
た毒物を与えて殺すと言う風に死
刑法の一つとして実行されたこと
もあった。

然しこれ等の方法は今と言う情
状酌量の方で古代から中世紀にか
けて、火あぶり、断頭、車裂き、釜
ゆで、四肢切断、目つぶしなどが
あり、タイラントネロはライオン
の餌食にした無情残酷な刑罪も行
った。この話は大方諸賢は既に御
存じと思う。

不可解な毒物

昔から文学や演劇には不可解な
毒物が登場するが、これ等は架空
の産物で、どこを捜したってある
筈がない。

例えばジキル博士とハイドの中
にある科学者が悪魔に変わる毒、四

暑中お伺

室町寺ノ内上ル

井ノ下晴芽

深草相深可

大鶴喜由

笹屋町大宮西入

大久保和三郎

相国寺北門前

田中烏雀

醍醐日出カ丘

竹松九角

山科野寺奥

小林亀一

同西野山

平井絵丘

同動修寺

平岩司郎

小山東大野町

本儀親生

暑中お伺

吉田圭井堂

堺市浜寺昭和町一丁三〇

電堺③三〇五四番

谷怪談のお岩を物凄しい形相にさせた毒、ロメオとジュリエットが神父から貰った薬液で四十幾時間も仮死状態に置かれた物語など、又ベストの黒死病に就って赤死病と言ふのがあり、ポーの短編小説に出てくる。これは全身の毛孔から血がふき出し血まみれになって死ぬと言ふ色彩感覚の鋭い病氣であり、てっち上げである。又ヨーロッパの或る古城で現代の城主が先祖の記録にしたがって城内の一室の壁を念入りに崩して見ると、中から全身の血管、毛細管に到る迄そのまゝ網様になった人型が出て来たとか、勿論筋肉も骨も其他一切が消滅し、怨めしそうな中世紀人の遺体が幾つも発見されたと言ふ。(これは七、八年前ある写真画報に記載されていたもの)はんとに身の毛のよだつ位の恐ろしい話である。城主の先祖が永年苦心の結果静脈注射による或る毒物を人体に注入すると血管だけが残って他は一切消滅すると言ふ現代医学でも考え及ばない毒物であつて、犠牲者に注射し苦しむのを片っ端しから壁に塗り込め、その記録を残したと言ふのだから、全く世界残酷物語りの一つである。でも面白い話ではないか。

砒素毒——古くて新しい
洋の東西を問わず自殺他殺に広く用いられた毒物に(勿論薬用にされているが)砒素系のものがある。現代感覚で考えると、砒素を用

いた殺人犯罪又は自殺は愚の骨頂と言わねばならぬ。それはその症状から、死体状況からすぐにわかり欧州では愚人の毒と称される位我国でも岩見銀山鼠殺しと言つて大名のお家騒動によく使つたのだからあまり利口とは言えない。現今ではこんな毒物を犯罪に用いる愚者は殆ど居ないのではなからうか。

農業の砒酸鉛とうどん粉を間違えて中毒した例は時々あつたが、特にあの粉乳中毒事件で大騒ぎになったのは、酸化防止中和剤として添加した第二磷酸ソーダに不純物として混入していた砒素に依つて可愛い盛り乳の乳児を多数死なした訳である。この事件がキッカとなり食品衛生法改正案が議院に提出され成立したのである。こと食品衛生管理者には薬剤師の他、医師、歯科医師、及びこれと同等の学力資格を有する者がなる様規定づけられている。

青酸カリ——驚異の毒物
ヒューラーが自殺に使つた?とかの青酸カリは、又帝銀事件の残忍冷酷でも知られている現代化学工業の産物であり、世紀の毒物である。その電激的な死と言ひ、砒素毒のように吐いたり下痢したり大騒ぎすることなくあつたと言ふ間

に決定的な死を来す。(致死量以下は別)近頃のドライな世情によくマッチしてると言える。そうかと思うと或る化学工場にはこの恐ろしい青酸化化合物(ソーダ塩)

が多量に作られ、ドラム缶に詰められてゴロゴロころがしてあることは実に驚かされる。もっと管理するようせねばならぬと思う。

毒ガス

これには一酸炭素、メタンガス、アンモニアガスなど中毒を起してしばしば三面記事をにぎわしている。塩素ガスも然り。日曜日にはとりまて教会に行き神前に額く白色人種によつて考えられた毒ガスは大量殺人の目的で戦争に用いようとしたアイデアは、天人ともに許せない非人道的なものである。

フオスゲン、緑十字、青十字、イペリット、クロールピクリン等が相ついで現れ、第一次世界大戦の時、独軍が西部で最初に使つた時の死傷者数が一五〇〇人あるから、第二次世界大戦に広島、長崎に落された原子爆弾から見ると、まだしも許されるべきと言つてよいだろう。

世界大戦が競うて大気を汚し、水や食物を汚染し、放射能の雨を降らせ、ジリジリと人類の墓地を掘つては現状はわれわれ国民にとっては何と寒心に堪えない次第ではなからうか、人類の滅亡など一歩進んで考えた時、洵に恐ろしい極みである。

細菌毒

素人には細菌は扱いにくい。犯罪に使う場合は多くはその道の知識を有するものである。それ以外は専ら中毒事件である。

古い話で恐れ入るが、昭和十一年浜松市の中学の運動会に配った大福餅がゲルトネル菌で汚染されていたため二、三〇〇名が腸炎を起し内四名が死亡した事件、昭和十七年浜名湖の新居町にアサリ中毒事件、昭和二十六年には北海道岩内に於ての「いすし」を原因とするボツリヌス菌中毒事件、其他学校給食の粉乳中に葡萄球菌が居て中毒したり、この様な事件は数多くある。高温多湿のわが土地は醤油、味噌、納豆などの恩恵もある一面これも一つの宿命かも知れない、用心にしくはなし。

ふぐ毒

ふぐは食いたし命は惜しんで中毒したら死を覚悟しなければならぬものにふぐがある。これから寒くなるとふぐのシーズンであるが、刺身、ちり、ひれ酒に舌鼓を打つのもよいが死んでしまつたら何をか言わんやだ。命と取り換へつことをする程のものでもなさそうだ。一体ふぐは日本中国を主に東洋方面で賞味されるのだが、その種類は約三〇種、食用にされるものは内十三種、最も美味な時は最も毒性が強いと言われるから二要小心。卵巣、肝臓、腸、皮、の順に毒が強いと言われ、その毒テトロイ

川傍柳初篇研究グループ

昭和四十年八月

幹事 川端柳風 東京都渋谷区本町二丁目四六	整理 高須啞三味 東京都港区 西新橋一丁目三ノ五	共述 前田喜代人 下関市人形町六ノ七	岡崎重義 福岡市野多目字卯尺 八五三ノ九二	清博美 清水市八江二二四四	藤井和雄 宇都宮市西大宮町二四四九	丸十府 東京都豊島区 池袋六ノ一九八〇	指導 岡田甫 東京都新宿区 戸塚町二ノ四四八	関戸宗太郎 石川県小松市上寺町二八	西川晃 大阪市西成区東入舟町二	黄瀬美秋 滋賀県水口町三本松	室井八九寸 京都市北区紫野東連 台野町二四	川端東雲楼 富田林横山一九七
-----------------------------	-----------------------------------	--------------------------	-----------------------------	------------------	----------------------	---------------------------	---------------------------------	----------------------	--------------------	-------------------	-----------------------------	-------------------

ドトキシンの致死量は青酸カリなどは到底足下にも及ばないものである。一匹の卵巣は僅に十数人を殺すに足ると言われる。このドトロイドトキシシからヘバトキシシと言う鎮痛剤の注射薬が市販されたこともあったが、いつの間にか姿が消えてしまった。

蛇の毒

この毒はふぐの毒と違って仲々の凄味がある。猛毒性蛋白液——ウエノグロブリン、ウエノペプトンを毒腺から毒牙の方に出し瞬時にして敵を倒す恐ろしいやつである。

クレオパトラの死にドラマチックな効果を与え、シャイロックホームの探偵物に出て来たりするのはこの毒である。コブラやハブはさて置き何と言っても、昔から我々にお馴染みのあるあの三角頭のマムシは乾物になったものを反鼻と言ひ黒焼きになったものを反鼻霜と言ひ又は五八霜と言ひが、強壯剤として結核の人によく用いられたものである。又マムシ酒を作り内服用にもしたが外用にした。この黒焼の有効成分はコレステリンやタウリンだとのことだが、東洋では黒焼にすることに依つて、不要な部分を除去有効成分に変化を与えないで濃縮することを考えたものらしい。然しいもりの黒焼のような迷信的なものもあり狼の

脳を黒焼きにしたものもある。ヌカルブンチンのように現代でも医薬に採用されているものもある。

蛙の毒

昔から使われているものにセンソと言ひがある。宴会余興などによくやる軍中ガマの油のご愛嬌はヒキ蛙の表皮腺から分泌する乳白色の毒液を麵類の粉末と練り合せて餅の様にしたものである。これがセンソである。これはデキタリス様強心作用を持つプロトキシシと言ひ成分からなり、六神丸の主成分はこのセンソと午黄とであつて、デキタリスの四倍以上の強心作用があると伝えている。センソニン、プロタリスと称して市販されていたこともあったが、時代の移るにつれ水泡のように姿を消してしまつた。

矢毒

植物毒となると数え切れない程多い。そのみんなについてはとても書き切れないしその知識も持ち合さない。ただ一つ代表として記して見たのはこの矢毒である。さて人類の歴史はそのまゝ、闘争の歴史でもあると言える。食うため生きるために色々と戦つてきたが、その水い年月の経験から数多くの毒物を知り、狩や闘争の武器であつた弓矢に用いて一層効果を挙げようと考ええるようになった事は当然の成り行きではないだろう

か、各種の民族の中で、矢毒が広く使われるようになり、未開の野蛮な種族でも、これの調製中は、一定の魔神が入りこんで来るものとして、その神を恐れ、調製方法や儀式は厳重に守られていたものらしい。

エクアドルのカネロス族では、住家から五〇キロ離れた森の中の一軒家を調毒所として、その中は二人切りの長老の調毒師だけがはいり、一日断食して八日間巨る仕事の間は、青いバナナを焙つたものだけを喰べながら三〇程の原料をドロドロに煮るのだが、この小屋と住家との間の材料置き場の小屋は絶対に女人禁制であり、発ち昇る蒸気は魔神の怒りの現れであると信じ、禁欲と断食はその怒りを鎮めるためだと信じ込まれている。

矢毒で知られているのはクラレであるが、インデアンがよく使用する。これも調製法を神聖視し、民族的伝統として注意深く守り伝えて来た僅かな数族から買つたり物交したりしている。このクラレについては文献が多いから詳記しないが、矢毒としてどんなものがあるか簡単に記すと、
(一)中樞麻痺性矢毒——阿片、ベラドンナ葉、ヒヨス葉、煙草、
(二)中枢興奮性矢毒——アドニス根(ペラドリン含有)、イグチウ

ス豆(ストリヒニン含有)

(三)中枢及び末梢作用性矢毒——トリカブト(アコニチン含有)、カラバル豆(エゼリン含有)

(四)末梢麻痺性矢毒——クラレ毒、種々のマチン風植物(クラリシ含有)

(五)心臓に作用する矢毒——種々のストロファンツス、蕃椒(カプサイチン含有)、われわれに最も身近かであるアイヌが熊をとる矢毒は呼吸毒であるアコニチン含有するトリカブトを「スルク」と称し用いているが、勿論、単一ではなく色々のものを混ぜ合せて調するのださうである。

其他に矢毒として、魚毒——ふぐの他、鰻魚白エ、赤エイなどがあり、クモ毒、サソリ毒、ガマ毒、(リポイド溶性で皮膚を紅潮させ灼熱感を与える)などがあるが省略する。

以上毒にも薬にもならないことを書いて恐縮している次第ですが、思えば悠久数十万年、人類の歴史や経験と共に、蛮人などが作つた矢毒の一つをとりあげて見ても、夥しい犠牲者の積み重なり合つた結果から得たものであるが、実に貴重なものと言わねばならぬ。毒に関してはその恐ろしきにも拘らず、案外にこれ程人間的なものはないと思う。終り。

暑中お伺

富柳会

阿部柳太

富田林市富田林二七一

田垣方大

倉敷市水島西寿町七番八号
電話倉敷四四一七二〇八

渡辺曉童

愛媛県越智郡吉海町仁江

小西無鬼

富士子

兵庫県多紀郡篠山町小川町

佐野ト占

八代市大手町

八代地方事務所前

大阪形水

大阪市東区糸屋町

一ノ二



「西成界わい」を 結ぶに臨んで

魚住 満 潮

吾れ柳界の子規たらんと、一生を川柳に捧げられた、恩師路郎先生は遂に逝かれた。五十九年の私の生涯に、こんな大きな悲しみを、体験したことはかつてない。

川柳に手を染めて三十五年、いろはの、いの字から先生に御指導をうけ、路郎先生一辺倒で、今日まで通して来た私、川柳の雑誌と云えば、「川柳雑誌」より他は知らない私、ただ黙々と句を創り、あとは一切先生にお任せして来た私である。

去る昭和三十五年の正月、新春のご挨拶に不朽洞を、お尋ねした際、路郎先生は私に向って、「満潮、君は若い時は、わりあい、いい句を見たが、最近ではさっぱりやな、句が死んでいる、五十代と言えは作家として、一番あがらの乗っている時だ、この機を逸せず再出発することだ、君なら必らず創れる。君の句は、社会悪を突くことが

多いが、それは句主の持つ思想の具現であるから、一向差支えないが、作句の上で充分注意しなければ、一歩あやまると世相本位の低級な川柳になるおそれがある。真実の中に詩情が加味されてこそ、香り高い芸術と云えるのだ、この点心すべきである。」

両親が吾子を訓す如く懇々と仰言った。私は師の恩愛の大きいなるに涙して不朽洞を退出したのである。

私が「西成界わい」の作句を決意したのはこの時である。

川柳塔に毎号連載して来た、私の「西成界わい」も、本号を以って、ひとまず結ぶことにする。昭和三十五年新年号（三九二号）以来本年八月号（四五九号）迄で六十八回に亘り、発表した句も四百余句に達した。

丹念に拾うてゆけば、まだまだ西成界わいには、多くの川柳が転がっている。私は一生をかけ

て、南米の何処かの国の人達が、川底からダイヤモンドを探し当てるように、私は西成界わいに転がっている川柳の、一句、一句を丁寧に拾いあげ、最後の一句まで拾い尽す心構えでいたが、この度の恩師路郎先生のご逝去により、心なくも初志を断念せざるを得なくなった。

然しながら昭和三十五年一月、従来五年八ヶ月、この西成と言う大きな海から、四百余句の川柳を

酒



清

灘・魚崎

金露酒造株式会社釀

得たことは、私にとって実に大きな喜びであり、それはささやかな財産でもある。

此ひとえに恩師路郎先生のご指導の賜であることを肝に命じて終生忘れない。私はよき師を得て、柳界一の倅せ者である。

師を憶う

今日からはひとりて歩け災の中
満 潮

初代川柳と同時 代の 前句附について

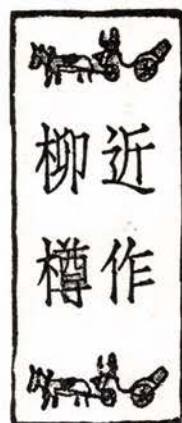
八 木 摩 天 郎

俳諧から前句附が分出した時代は、何時と確定し難い。また確定し得べき性質のものでもないもので明かではないが、今仮に、明暦万治頃から次第に発達したものと仮定し、川柳の万句合創刊の宝暦七年までには、時間的に百余年経過している。初代川柳と同時代の前句附の選者については、誹風柳多留十八篇異綾軒可有の序に、川柳の外、蝶々子、苔翁、竹丈、雲鼓、白翁、菊丈、牧月、如露、嶺松、南花坊、黛山、一翁、千鶴、圭女、東月、白鶴、露丸、机鳥、錦江の十九名を挙げている。其外に、木翁、東俊、月船堂、花鈴、黙潭、琴公、一風、豊久、不才翁、桃人、金桂、東風、万竜、八百翁、雲龍、監名田可有、其国、湖丸の人々も同時代の前句附の人であるが、総じて、附句と云うのは、選者の提出した前句即ち課題の短句（七七）又は長句（五七五）若くは五文字に対して、応募者の構想した

解答句を謂うので其調子如何は、選者の抱懐する主義思想を示すことは云うまでもない事である。その調子から移動の推移を見ると、難波から江戸に移り、漸次歌詞文語調から俗語口語調に変わり、遂には前句其のものを切放した十七字の風俗詩型となったが茲に注目すべき事は、初代川柳と同時代の選者との相違は、初代川柳のは、直に江戸っ子らしい調子のある事で、こゝらが他の選者と違っていた。選句の甘かったのも勿論であるが……

同 社 誌 中 暑

麻生 霞 乃	北川 春 巢	川村 好 郎	戸田 古 方	清水 白 柳	真 鍋 一 瓢	橘 高 薫 風	浅 川 八 郎	菊田 い さ む	西田 柳 宏 子	八木 摩 天 郎	林 宏 子
編集局								句会部	総務部		



麻生路郎選

川村好郎選

追憶のとぎれとぎれに遠くなり

竹原市 杉原 愛鳩

品行方正が娘の気に入らず

同

ジョッキではゆっくり話す気にならず

同

一円まで割る割勘の味気なさ

同

運転手を拝みたくなる七曲り

同

さわぐ血もなし初恋に逢えたとして

同

嫁こうともせずコケシを増やすだけ

同

選挙屋が今度は反対党で来る

同

ホームドラマの中に自分^が居てあわて

同

義理で来た見合あらばかり見え

高知県 山川 勝子

つぶし値にしてもと嫁の荷見積られ

同

内職もストがやりたい日がつづき

同

割勘のビール下戸は出ししづり

同

早乙女の股間から土堤へする返事

同

衣食住足りて両親を粗末にし

同

運は天メスは主治医に任す痛

同

女ぐせ療養所でも出来ている

同

頼られる自分の地位がはづかし

愛媛県 横田 放人

役付になったを妻は子に自慢

同

菜園の曲った胡瓜の新鮮さ

同

ペンペン草も分相応の花をつけ

同

紋切りの祝辞身に余る光栄と受け

同

完納へ税務署ちよっぴり世辞を云い

同

役付になって叱言をもう覚え

同

この町の銀座八時にもう暗い

出雲市 森山健太郎

別居する条件母に黙ったとき

同

買わないとわかり微笑やめにする

同

セールの名刺のように忘れられ

同

求人難昼のバチンコ混んでいる

同

棄てられるガムの運命に似た女

同

内職の手を休めずに無心聞く

同

泣きにゆくのに女化粧する

玉島市 井上 旭峯

時機を見て手打ちにさせる年の功

同

重箱で田舎の祭持ってくる

同

未亡人針一筋の乱れなく

同

暑中お伺

東京都中野区若宮三丁目四
二番八号

阿部佐保蘭

名古屋市西区米田町一六

長谷川鮮山

電話九〇四五番

橋本 緑 雨

大阪市東住吉区平野西之町
八三

木村 千 容

岡山県倉敷市新川町
一〇〇一番地

川維

竹原支部一同

大阪通信病院

烏ヶ辻川柳会

会長 田中十方 幹事 榎本 路児

若林 草右 中谷 ハナ子

市場 没食子 水谷 竹莊

西辻 竹青 木村 よしを

井上 露芳 家村 高王

古谷 まさる 宮員 北川 春葉

幹事 小沢 史葉 堀 風仙洞
森下 愛論 会社 橋本 幸男



切り札は無いが男の肚で生き	同	肩書がついて酷暑も寝ておれず	仙台市	平野	光道
宿命とあきらめ切れぬ混血児	同	厄除けの神符もよごれ定年期	同	同	同
きつと来るあなたへ月が美しい	同	検査官と言う小役人を正座にし	同	同	同
明日埋まる浜辺蟹はどうする気	竹原市	処女の肌の思いで新刊書なでる	同	同	同
天気予報どれかが当たるから不思議	同	ボーナスを妻は荒れた手で数え	同	同	同
苦勞して建てて本家のせいにされ	同	雨の葬儀用電打って義理すませ	同	同	同
居ないとは解る鍵だが触ってみ	同	人間になりたい貝のひとりごと	香川県	三井	醉夢
この島の尽きぬ旅情は紺紺	同	やがて乗る霊柩車でも親しめず	同	同	同
事故現場仔犬チヨロチヨロ顔を出し	同	追い抜いた単車いい気味捕えられ	同	同	同
山奥でもよし出張の酒の味	尼崎市	美容師の甘言黒を茶に染める	同	同	同
満ち足りた二人タラップ駆け下る	同	旅情ふと妻へ便りを書く若さ	同	同	同
大漁の魚スコップで詰められる	同	老いぼれていないと敬老会に出ず	同	同	同
市になってなをわらぶきの家に住み	同	金要らぬ方に衆議一決し	大阪市	河本	雪男
山奥のここも観光ダムの夢	同	不愉快をあくびに包んで席を立ち	同	同	同
結婚記念日今度は妻が忘れかけ	同	お互に許しているのに意地を張り	同	同	同
付き合ひにする合掌のうつろなる	大阪市	こんなにも恋が俺を強くする	同	同	同
冷房の効いた画廊で待ち合せ	同	子の背伸びその手の先に月がある	同	同	同
同窓会まだ嫁かぬのが派手に来る	同	孤独なる日犬と戯れる	同	同	同
人の世に忘却という逃げがあり	同	内幕が女の嫉妬であばかれて	堺市	田	くり坊
鍵っ子のボール夕焼に染まる	同	窓ガラスに飛ぶ蛾の生きるあせり	同	同	同
仁王の目に蝶の邪心がみすかされ	同	すき間風心の空間通り抜け	同	同	同

那谷光郎 加賀市大聖寺荒町四三	工藤甲吉 青森市金沢一〇の四九	横紫光 愛知県宝飯郡小坂井町大字 伊奈・富士紡南山寮内	秋月宏方 和歌山市今福東ノ町二二八	福田丁路 高槻市氷室六九二ノ四	長野元一 (号・井鮎) 山口県防府市大字西佐波 令字幸地一三一六ノ一六	桜川不水 下関市東大坪四町十八ノ十一	後藤梅志 大阪市西成区玉出新町 通一丁目一 電話大阪65局五五三二	川柳雜誌社 岡山支部
--------------------	--------------------	-----------------------------------	----------------------	--------------------	--	-----------------------	--	---------------



反対の反対会議まぜ返し	同	花菖蒲節句がすぎて格が落ち	同
素麺へ故里の味青い紫蘇	同	衿足に熱い視線を意識して	同
有頂天それから続く下り坂	同	何時からか妻の機嫌をとりはじめ	同
台所の配置後妻の気に入らず	島根県 山本 朱紅	思い切りど鳴ってみたい梅雨の空	大阪市 中川 滋雀
ラーメンが伸びて残業はかどらず	同	パトカーの余韻都会の夜綴る	同
捨てせりふ帰る心に残るもの	同	踏まれても踏まれても善意がのぞく	大阪市 林 宏子
旧姓で呼ばれ事務所へお茶を出し	同	損をする人生を楽しもう	同
三面に小さい善意の灯がともり	大阪市 脇 道隆	癪にさわることあり食塩入れすぎる	同
誓約書それが気になる手術台	同	海の行波音お経を乗せてくる	大阪市 和泉 松風
香水の匂う便りに励まされ	同	五月晴おしめの上へ鯉幟	同
鼻ひげを延ばした方が運転手	同	露踏んで今日の元気がありがたく	同
お互いの子を褒め合って女風呂	金沢市 根上 杏花	焼香の煙へしばし死を想い	名古屋 花東千久良
雄弁とおだてて選挙に狩り出され	同	運命へよろめき信仰へはまり込み	同
気候などどうであらうと衣替え	同	友の計報齢を数えれば同い年	同
朝顔のさかりベコニヤ放つとかれ	大阪市 藤富 淀月	転勤が決ったのに課長まだ叱り	倉敷市 行吉 照路
うっかりと恩師へ郵券不足出し	同	銭別を仏間に供え意気新た	同
秀才と云われ親にはまた苦勞	同	家計簿の赤字政治のせいにする	同
すねて甘えて頼りにしてす操従法	愛媛県 嶋本 満子	古里は心の隅に居て遠く	倉敷市 水粉 千翁
共稼ぎそろそろ産めばという夫	同	少年の日よ平凡な我を見よ	同
褒められて借着ですともよう言わす	同	茶目気の仕草で女すり抜ける	同
太るのはいやだが細れば気にかかり	大阪市 宮尾あいき	ソツのない先手先手に左右され	七尾市 松高 秀峰

舟ばたを水が燃えてる鵜飼の火

若柳潮花

高槻市富田町七六七
総持寺団地三六号三〇四

姫路市茶町三六

不酔 隠岐朝夫

②4〇八四二

川雑 大聖寺支部

石川県加賀市大聖寺
耳聞山町三六さんばつは
何はともあれ

男前

(南柳)

え

ま

男

大阪市阿倍野区
天王寺町北一ノ十八
(省線寺田町裏駅南一丁)
TEL ⑦6287



お悔みの言葉も練習若いパパ
朝顔は咲けど育てし夫亡く
たましいは生きてる生きてるひと家に
紅一点けなされながら持てている
世の中を知らぬで許さず満二十歳
もめている二人と知らず鹿が来る
二人に鹿よし塔よし雨もよし
男嫌いされどルージュの色濃く
栓抜きの順待たされて飲み足らず
田が減って軽量級の家が建ち
妻も子も隣の生活真似たがり
回復期そろそろ恋し酒の味
ゆとり出来妻の顔にも艶がさし
交通安全なびかせドライバー突っ走り
よう断らず損をまた背負い
恋秘めた編みものは休ませず
腰深く折って御無沙汰詫びてみせ
次おごとと言うて別れて寄りつかず
孫の無い寂しさ五十の肩がこり
駐在所へ目こぼし頼む特級酒
身分証前科を問わず書いてくれ
子のお古パパがにこにこ着る平和

同 香川 伊藤 歌子
同 大石郡山市 中内臥竜子
同 奈良市 村上 春己
同 神戸市 吉田 隆史
同 青森県 岩淵 一星
同 大阪市 山田 李鳥
同 石川県 三宅 ろ亭
同 河内長野市 森本黒天子
同 玉野市 小谷 仙山
同 神戸市 大野木真砂
同 大阪市 天正みさ子

寒い梅雨米の値上り気にかかり
汚職々々月給安いだけでなく
停年の口と酒だけ達者です
男の言葉素直に聞けぬ齢になり
蒔いた種刈るべく鎌の錆付いて
マンションの室代妻の里でもち
茶摘笠どれが嫁やら赤樺
自分ではなかった噂煙草喫う
染め直ししたい女のすまし顔
コーラスの余韻残して観光車
駅伝が去って湖岸の陽が沈み
選挙ビラべたべた貼っている自信
水田の値嵩豪華な家が建ち
張切らねば世間にすまないこの健康
大見出し隣の夕刊気にかかり
世帯など遠に忘れたはしご酒
胸借りた恩を返した下手投げ
親切な上司汚職の匂いがし
竿ついで隣と競う鯉のぼり
菖蒲湯の白髪同志の健めな顔
道路工事市会議員の票固め
怒鳴ってやるつもり電話まだ出ない

同 大阪市 福富 隆子
同 鳥取市 近藤 秋星
同 大阪市 木村 独水
同 大阪市 齊藤 流路
同 出雲市 影山 青三
同 松江市 岡崎 祥月
同 茨木市 高木繁太郎
同 宮城県 川村 映輝
同 松原市 守屋 万竿
同 大阪市 柳生 政夫
同 大阪市 鈴木 生仏
同 宿毛市 渡辺伊津志
同 大阪市 田中 多幸
同 大阪市 田治 一登
同 大阪市 川口 弘生
同 兵庫県 常岡 孝風

暑中お伺

八木 摩天郎
八木 徳子堺市九間町東二丁目
電話②七三三五番小児科・沢田医院
沢田四郎作

大阪市西成区

玉出本通り一ノ一三
電話四二九一三大阪市交通局川柳会
暑中お伺北川 春巢
浜田 胡蝶
富岡 淡舟
橋本 雅楽
児島 与呂志
岡島 孤舟
米虫 一の字
西岡 洛醉
小田 垣蝸牛
藤井 力泉
福島 正則
山口 雅万
山谷 惣治
室深 醉升
草

川 雑

支部

同

一



信貴に遊ぶ

六月二十日

阿倍野・玉造支部合同吟行

やがて会場をどこにしようかという相談になった。私が交渉して来ましよう、栗さんが気軽なに立って行かれた。

一 舟

落ちつく所は本堂の下にある千手院にきまつたが、すぐ隣りにベンキ塗りの建物があるのがいささか気になる。

文 秋

句作に専念していても、本堂から注意を呼びかけるマイクの声が筒抜けに聞こえる。

佐と寂とばして古寺にマイク鳴る

柳宏子

俗化せにや保てぬ寺の台所 一舟

伝説を糧に古寺やと生き 双葉

句作している間にも時折にわか

雨が樹々をしめらせて行った。

通り雨はめて指さす多宝塔 栗

帰る頃には雨もなく、それぞれの

コースで帰る事になったが、大半は信貴、生駒ドライブウェイの

コースを取ったが、あいにく急に

立ちこめた夕霧の為、視界は全く

とざされ、見晴しどころではな

く、トンネルをくぐっているよう

な気持であった。

あいにくと見えない訛をバsgai

ド

生駒へ来てからも視界はよくな

市 郎

らず、仕方なく梅田までバスで行く人も大分あったが、数人の人はケープルで帰ると言って、吸い込まれるように霧の中へ消えて行った。

文秋記

柳志寸言

本多 柳志

◇週刊誌を見ていると、お金に関する金言名句解説の頁があった。

読んでいる中にこれはおかしいぞと気がついた。案の定信託銀行の

全面広告である。読ませるアイデ

アに感心するより先に、うまくだ

まされたうつぶんの方が大きく後

に残った。

◇多人数の集団生活の中には、必

要な人間と不必要な人間とが、必

ず居るものだ。川柳には不必要な

文字が一つでもあってはならな

い。

◇結婚したと聞けばお気の毒に

ね、と言ひ。別れたと聞けば、まあ

良かったわねと云う。体験者の言

葉には、いつでも真理がある。

◇原爆の恐ろしさをほんとうに知

っているのは、自慢じゃないが日

本人丈である。フランスや中共が

実験をやって見るのも、其の恐ろ

しさを知る上に、又その為戦争

否定へと前進するならば、意義が

ある。

◇能面も展覧会場で見たのでは、

その良さを覚えることは出来ても、

味う事は出来まい。舞台の上で舞

い感情を表現する時に、そのほん

とうの良さを味う事が出来る。

路郎先生を偲びて

並木東田 樓

「君、お互にこの地球はもう

せますぎるよ

宇宙界のどこでもいい。

僕は今新天地発見のため

我等の地球を見捨ていよく

今日出発したのだ

何れ現地から報告する

から待ってろよ

それまで健在でね」

車

福寿の

心斎橋筋大丸前

電話四三三四番

前日からの雨で気づかわれていた天候も、朝から雲間も見え、一日持ちそうな日和、喜び勇んで銘々上六近鉄に集る。

万一を思うてか、皆傘を持って来ていた。

傘がもちになればいいがと持って出る

竹荘さんご夫婦はじめ子供を入れて、総勢二十四人、行きは時間的にすいているように思ったが、日曜の事とてかなりの人出のよう

だ。

本堂で一度は見て来ると言う戒壇巡りがある。

かいだん廻り怪しい声に引きこま

れ

連呼する戒壇めぐり歩居めき

戒壇を出れば生きてる欲信じ

凡九郎

拝観料寺の古さへ箔がつき

梅里

一般に信貴山で親しまれているが、正しくは朝護孫子寺と呼び、聖徳太子の創建といわれる古寺で、壮麗な堂宇が幾十と建っている。

本尊より先ずゆうずうさんに頼んどき

多聞天その本尊は見ず拝み 金三

とくに本堂は数年前に再建された美しさがあり、堂から王寺方面の展望のよいところから山の中心

になっている。

本堂で一度は見て来ると言う戒壇巡りがある。

かいだん廻り怪しい声に引きこま

れ

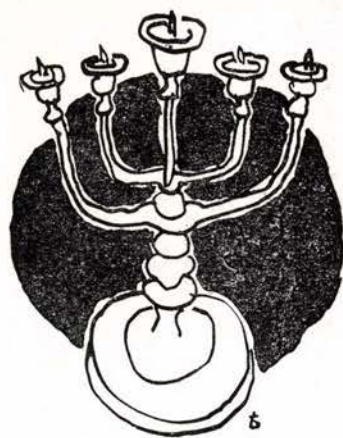
連呼する戒壇めぐり歩居めき

戒壇を出れば生きてる欲信じ

凡九郎

拝観料寺の古さへ箔がつき

梅里



大陸放浪 (4)

皇帝最後の日

東野 大八

満州国皇帝傳儀―建国十周年記念式典の当日だったが、私はこの人に遠目の姿だったがお目にかかっている。

日本製の大元帥の正装で、文武百官をキラ星の如く随え、建国廟に向わせられる皇帝。そのお姿は中国式粉飾で金ビカビカ、まるで出来たての菊人形でも拝見しているようだった。壮重なる偉厳にみち、肅然たるその儀場は玉砂利を踏む音だけが響いた。

しかし、敢えなし、この皇帝傳儀は、わずか十三年にして夢まぼろしの如く消え失せた。

私と面識を持つ小林清之助氏は、もと岐阜県稲葉郡那加町の町長さんだが、この人はかつて泣く子も黙る関東軍総参謀長は泰彦三郎閣下の副官であった人だ。しかもこの泰さんは関東軍最後の総参

謀長で、いわば大満州国の死水をとった御人でもあった。

「人民中国に傳儀元皇帝の手記が載っていますがね、私はこれを読むたびにこの方がソ連に拉致されるその瞬間に居合わせた、あの日のことを思い出し、索然たる思いにとられるのです」

小林さんは、私にこういつて密かにその当時の模様を語ってくれたのであった。

以下「私」とあるのは、小林さんご自身である点を御承知ありたい。

昭和二十年八月九日、ソ連軍は北満州の三方から怒濤の南下を開始した。総司令官はワシレンスキ―極東軍司令官で、機甲部隊をふくむ八十余万の歩兵部隊に呼応し、空をおおう空軍の一部が満州国の首都新京を襲ったのは八月十

二日の払暁であった。

日ソ中立条約がこの年失効して、ドイツの敗色濃厚となるや、ソ連の満州侵入は時間の問題とされていた。何分、そのころの関東軍は南方へ主力が転戦、全くガタで、かつての無敵関東軍はクスリにしくもなかった。そのため、万一の事態に備え、華北の戦車兵団が新京目指して北上中であつたものの、時既に遅かった。

八月十二日の空襲によって満州帝国はその崩壊の第一歩を踏み出した、私はそう信じている。というのは、この空襲によって泰さんも私も、事態の容易ならざることを知り、傳儀皇帝を安全な場所に隠す必要を生じた。それは直ちに実行にうつされ、翌十三日早くも私の生涯にとって忘れることのないことが起つた。

この日は、満州国の最後を悼むかの如き、しようじようたる細い雨が地面を打っていた。私は泰総参謀長と二人っきりで、新京の東南、揚樹屯の小駅に皇帝一行のお着きになるのを待っていた。夜であつた。私も泰閣下も黙然とただ立ちつくし、わびしい敗戦の雨音を聴いていた。私たちは誰がこの日を予想し得たろうか、索然無量のその夜雨の冷たさ。

やがて数台の自動車が雨の中から姿を現わした。

平服に着かえた長身の傳儀皇帝をはじめ、第一夫人、第二夫人、愛親覚羅浩、満州国総理張景惠、宮内大臣熙洽、協和会の橋本虎之助、それにわずかな宮中のおつきの人々、一行は黙々と汽車に移った。

傳儀皇帝は、満州建国廟の神体

暑中お伺

富士野 鞍馬

東京都港区麻布宮下町三〇ノ二

桶口 舟遊

西宮市鳴尾町一ノ一五八

奥谷 弘朗

鳥取県倉吉市荒神町

小林 孝正

新居浜市中須賀スタンド柳

山内 静水

竹原市竹原町田中

久家代 仕男

平田市灘分町一八二二

浅川 八郎

富田林市彼方三三一

藤村 女

大阪市住吉区我孫子町二丁目三十三

川柳 並木会

岡山県笠岡市山口

山田 季賛

山田 スミ子

大阪府高槻市西五百住三ノ四七幹線アパートB一〇二

をくるんだ白布の包みをしかと抱きしめ、口をぐっと引き結んで、じつと小雨降る窓外の暗い夜をにらんだままだった。おつきの人々もこの皇帝を遠巻きにして一言も口を開かず、ほう然と座席についてしまった。

やがて出発の時間が迫ってきた。皇帝は汽車の窓をあけさせ、そこから細い手をさしのべ、窓下の泰さんの手をしっかりと握りしめた。そして握られたその手の上に、夜目にもはつきりとボロボロと涙をこぼされたのである。

満州国皇帝をどういう風に処理してあげればよいか、それに一番頭を悩したのは山田乙三総司令官と泰総参謀長、それに張総理の三人であった。結局関東軍司令部が移る予定の通化の奥、臨江ときまっていた。いわばその門出がこんな具合だったのである。

一行が出発して二日後、つまり八月十五日に終戦の詔勅が出た。そこで私たちは、皇帝を日本に亡命させるべく、大本営に伝えたが、来られるのはよいが、生命の保証はできかねるという冷たい返事がかえってきた。利用するときにはして、一旦こういう事態になると、ケンもホロロのそんなあい

さつ、私は軍部のやり方に人間的義憤を覚えたことである。

とにかく皇帝一行は目指す臨江も危くなったので、八月十七日奉天に移った。

当時すでにソ連軍は奉天に入っていた。しかし、各地で無傷の日本軍や、徹底抗戦の兵隊たちが降伏せず、がん強に抵抗をしていた。これに手を焼いたソ連軍は、元関東軍の首脳部にその鎮圧を要求してきた。そこでソ連軍におさえられた日本の軍用機や、民間機を借りて、終戦のビラまきをやって、私たちはこの飛行機を利用して、こっそり皇帝を日本へ脱出させようと考えた。皇帝の奉天入りはそのためで、十七日お着きになると同時に飛行機へ移すという段取りになっていた。

私はその脱出の際、奉天飛行場でもそれとなく見送り、警戒の一人にも役立とうと考え、飛行場の日本軍詰所に詰めていた。

皇帝はやがて十余人のおつきとともに到着された。簡素な満州国の軍服姿だけに、敗亡のやつれは一しおで、みるからに暗く青白くやせほうけたそのお顔であった。

飛行機は満州航空機で、行く先

は日本と操縦士も心得ている。だが、そしらぬ顔で、伝單の積み込みをまつ風を粧い、皇帝のお乗りになるのをカタズをのんで待っていた。

やがて言葉少なに私たちと言葉を交し、会釈された皇帝が、待合室から立ち上り、ターミナルの方へと歩き出された。だが、おつきが多く、その態度もいんぎんなため、カンのにがいソ連兵にも眼につかぬはずはない。

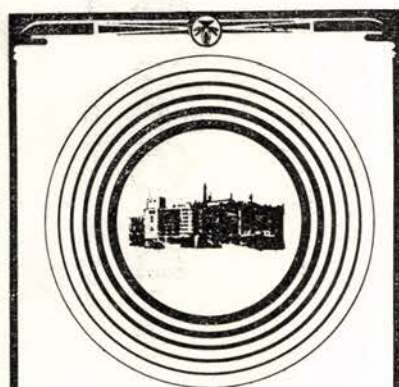
「一体あれは誰だ」とソ連兵の一人が居合せた満人にきいた。

「満州国皇帝だよ」

との返事に愕いたソ連兵たちは、忽ちバラ／＼とび出していき、皇帝をぐるりととり囲んでしまった。一瞬の出来事だけに、私たちはどうすることもできなかった。これが満州国皇帝がソ連の手におちた一瞬間なのである。

小林さんも程なく捕えられ、シ

ベリア行きとなったが、これとは別に、臨江と私（こんどはこれを書いている私の方）とはなじみも深い土地で、いまでもこの東辺道の写真が一枚だけ私のアルバムにある。東辺道開発株式会社大栗子欽事務所という看板を後に撮った古いものである。この事務所が満州国最後の閣議が開かれたとある。全山、光る鋼鉄の肌合いをもったこの欽山事務所をめぐる山々には、当時すでにしゅうけつを極めていたのが、反満抗日の南満州の巨頭金日成の匪団であった。往時茫々、こうした人間の流転の歴史を秘めて、東辺道から白頭山の山々は、今も無心の白雲をのせて展っているにちがいない。



たのしさひろがるお買物！

阪急

大阪梅田本店
神戸三宮支店

東京大井町店
数寄屋橋店

川柳雑誌社ハワイ支部

ウイロー社

同人一同

川柳雑誌社中部

戸田古方
黒川紫香
村上ゆずる
竹内圭三
小池しげを
永藤弥平
菊田いさむ

木

村

水 匡利
匡余

大阪市東淀川区
十八条町二丁目二二

万葉集

北川 春 巢 選

大阪市 西 川 晃

阿呆な本買いよるわいと古本屋

商魂はとんとござらぬ古本屋

ただ読みの常習犯を睨みつけ

しゃぼん玉五十男の淡い夢

叱るのに追われ学資にまた追われ

出雲市 竹 内 李 朋

立久恵峽

奥の院色即是空の鐘が鳴り

鯉鰻鮎の風味に蟬しぐれ

エクスタシーウィーン少年合唱団

倒産の噂社長は今日も留守

丹精の庭転動へ花ざかり

鳥取県 鈴木村 諷子

空砲もたまにゃ射たねばならぬ世の

鍬使うことは神技にひとしいが

ソーセージ世の薄情が滲けて見え

屈辱料もらえる日なりはしやいで

大阪府 早 川 清 生

奈良 周 辺

斑鳩のどの高壁も塔の下

山の辺の田植古代の血のあとに

菩薩めぐる働く妻のふとい腰

陵墓大小鴉なく声頭上から

大阪市 福 島 正 則

ガム噛んでおんな膝組む勇気が出

カキ舟の辺り綺麗な夜になり

一円玉で釣銭エグイ車掌さん

退院を延して欲しい仲となり

新居浜市 小 林 孝 正

月おほろ心の扉開けて逢い

四面楚歌大と散歩をして居たり

ヒューマニテイもあつて警官左遷され

好きと一言いえず遠くの灯を見詰め

岡山県 直 原 七 面 山

貰うもの貰って女身をかまし

エッチねーと女許す気

うわわ器用に使つてストリップ佳境

寿子嬢に捧ぐ

声掛ける隙も与えぬ寿子さん

鳥取県 清 水 一 保

酒までも味方にする気身の孤独

神聖な恋と信じる星月夜

鶏は憎めず卵の値を怒り

守口市 橋 本 雅 栄

ボーナスの機嫌を子等も見逃さず

結論を明日に延ばして先ず飲もや

日曜は混むよと子等が出たがらず

大阪市 今 西 章 雅

こぼれてはいぬかと団体願で読み

マンションとか名付く鉄筋二号邸

パチンコ玉拾うお尻に指狂い

新居浜市 安 藤 桂 仙

風吹けば風になびかん柳で居

つぎはぎの余生へ未練まだ残り

恋至上蝶のもつれを見ていたり

奈良市 村 上 春 巳

焼石に水の内職肩がこり

かい性の様に役人汚職する



ジェット機へ大の大人が顔を出し

菅屋市 丸川 初甫

長思いカルテが読めて不倅

結婚と離婚で売れる週刊紙

愚痴を聞く相合傘で肩が濡れ

枚方市 宮川 珠笑

この人も心にひげを生やしてる

やけ酒の月に聞かせるケセラセラ

叱られてすませる勤めうらやまれ

仙台市 平野 光道

飲めど酔えぬわけを知らずにやたら酌ぎ

しあわせの歌で結婚式を閉じ

衣食足り住はますます狭くなり

鳥取市 近藤 秋星

金が要る糞面白くない事に

誕生日砂丘の砂でも贈ろうか

乳房まだ若く無残な寡婦の座

兵庫県 常岡 孝風

サングラス女傑がかけてよく似合い

おトイレへ行かせて女給席を変え

風船を逃した故郷の空の青

大阪市 和田 痴亭

赤いシャツちぢいも孫とよく遊び

質へおく時計時報にびたり合い

今治市 越智 一水

一票を考え直す生活苦

じっと手を見るよりデモの列に入る

小松市 関戸 宗太郎

祭日は暦の中で済む生活

集団移住国で洋間と風呂を建て

和歌山県 山本 定男

家出などするなするなと蛙鳴く

遊びたい盛りを配る子を拝み

松山市 月原 宵明

謹厳な父へテレビは長いキス

紫陽花へ蟹の親子が散歩する

加賀市 那谷 光郎

ポスト抱くまでには酔わず月を褒め

テレビ見る顔捻じ曲げて床屋剃る

京都市 室井 八九寸

祖母にまでみせる車の初免許

続くトシ児に8ミリなどというたれず

京都市 大久保 和三郎

軸を背に花のいのちが陽に飢える

清貧という語があった自己偽瞞

塩釜市 川村 映輝

長者番付仁術の医者顔ならべ

新田地敷うぐいすに迎えられ

名古屋市 花東 千久良

昔噺を孫の理屈が攻めてくる

植木市値切ればまける値に迷い

金沢市 根上 杏花

若い者に心を合わせる本を読み

迷い子がマイクに乗って来る人出

羽咋市 三宅 ろ亭

落選は金がないとは云えもせず

彼も人我も人なり読書する

大阪市 福井 野迷路

今朝の夢欠伸一つで消えにけり

ベトコンの様に出没ドブ鼠

大阪市 森川 すみれ

林檎むくその指先までも好きな人

裏切りを許せぬ人の瞳が綺麗

青森県 木村 涼人

俺からも取る税があり国まずし

糞意地は張らじ五十の坂が見え



西宮市 樋口舟遊

銀鱗を木塊に埋め着和む

大阪市 花田繁子

ベテン師の造花の顔と花の貌

松江市 柳楽鶴丸

幼な子も八十老も欲に生き

春愁を麦笛吹いて掘り返えす

平和日本の片隅に生きる幸

大阪市 国広久江

倉敷市 水粉千翁

大阪市 天正みさ子

欲ばって作れば嵐皆たおし

たまさかに真つ直ぐ戻る胸を張り

ゆうれい手形欲にからんで割ってやり

大阪市 児玉充弘

借金へ戻す遠まわしの話

大阪市 大池芳

欲ほけも施設の寄付で見直され

倉吉市 奥谷弘朗

大阪市 谷川源川

大阪府 川口弘生

人生に踏切があり駅があり

福引も欲のない子を喜ばせ

互いの欲認めあっていて平和

善人の苦勞へ無精ヒゲが伸び

欲張って値上げをすれば売れ残り

大阪市 行吉生

玉島市 井上旭峯

大阪市 田中多幸

ただの酒欲張って飲み二日酔

トラブルのあとブロックの塀となり

食欲が出て病室が明くなり

七尾市 松高秀峰

愛し愛されてコケシの数も増え

大阪市 田治一登

PTA上座を明けたまま会議

大阪市 藤富淀月

欲ばりの皮の厚さは計られず

趣味の

鉄筋に住んでいけない雨の音

大阪市 木村濁水

きもの

神戸市 吉田隆史

欲ばってみても百まで四十年

きもの

本名で呼出す句会手間をとり

大阪市 多田富士

きもの

薄給の愚痴に毎日続く酒

欲ばった重い土産は置き忘れ

きもの

大阪市 西本保夫

欲はないいつて算盤はじく欲

きもの

部下を持つ身になってから休まれず

大阪市 柳生政夫

きもの

大阪市 佐和志津子

此の世での欲では足らず云い残し

きもの

家だけがあれば纏まる兄の縁

大阪市 鈴木生仏

きもの

宿毛市 渡辺伊津志

欲ふかく恵比須参りの多いこと

きもの

福 呉米店

高橋操子

岸和田市野田町一七五
TEL岸貝局②六六三一

明治川柳と風俗 (7)

奥津啓一朗

勸工場

明治十一年丸の内竜の口（永楽町二丁目）に出来た府立の東京勸工場（かんこうば）は、前年の内国博覧会の残品整理もかねて、寄合世帯ではあったが、当時の一流商店が気を揃えて出品したので、洋風の建物は粗末なものであり、近所はまだ旧屋敷を取扱ったままの草っ原で不便な場所であったが應々人力車で見物かたがた出かける人達で、開業以来かなり繁昌したそうだ。

入口で竹の皮草履にはき替えされてはいると、長い廊下の左右に陳列された各商店の商品をみて歩くようになっていて家庭用品ひととおりは揃っており、商品の総てに正札がつけてあるのは現今のデパート式、中央の休憩室には赤い毛布の床几など公園の茶店式ながらも寿司やしる粉などの店があったという。売子は職業婦人出現以前のことなので、言うまでもなく若い衆と小僧さんであった。

表口だけは立派な勸工場

買ひそうにして次へ行く勸工場

グルリッといひ見て通る勸工場

半我

勸工場練らせるやうに出来てゐる

勸工場近道をして叱られる

骨青

勸工場出口に這入る俄雨

桂村

勸工場出ると子守の毛をむしり

駄々坊

この勸工場が払い下げられて民営となり、二十一年に株式組織にし芝公園に移り、東京勸工場株式会社が東京勸工場と称した。その後、市内の各所に小勸工場が出現し、中でも銀座の九十、人形町大観音前、神田小川町のはその主なもので、銀座には九十の外にも商盛館、誠睦舎、京橋勸工場（小柳）丸吉、兩谷、博品館など、二十五年頃にはどこも相当に繁昌し、

上野広小路には階段なしで三階まで上って行く新式で店数も多い。杉山勸工場というのも出来た。

然し栄枯盛衰は世のならいで、

同業者が多くなると自然競争となり、素人向きの安物商品が増え、

果てはなんだ勸工場ものかと、客にも安っぽく扱われ、あきらめられてきたところに、大資本のデパート

の出現もあって次第に影をひそめてしまった。

蚊遣火

都会では夏の夜を蚊帳を吊って寝る家庭はあまり見かけなくな

たが、蚊や蠅が絶滅した訳でもな

かろう。よく効く殺虫剤がいろいろ出来た故であらう。明治の頃は

どうしたかという蚊帳に這入るまでの一ときこの蚊遣りを焚いて

過ごしたのだ。

懐炉灰に似た形のもの、灰の代りに鋸屑を詰めたようなもの

で、これを金風製の尖塔形の器の中に吊し、一端に火を点すると、

細い窓のようなところから白い煙が出て、座上に漂ようようになっ

ていた。

だが東京市内の御座敷程度ならこんなものでもよかったが、郊外ではこれでは蚊軍の襲来を防ぎようもなかった。楠や榎の木を小さく割ったものを売っていて、これを火鉢で焚いた。正に蚊いぶ

し、吾人間さまさいぶされてしまいうしろものであった。

蚊遣火の絵には団扇が置いてあり

衆笑

蚊遣火の馳走をたのむ軒家

ふくべ

蚊遣火の馳走をたのむ軒家に立ち

長谷坊

蚊遣火の後ろに置いて夕餉也

ふくべ

蚊遣火を吹きく女房酌をする

小阿弥

蚊遣火に女房の愚痴を聞いて

古蝶

蚊遣火の風上に嫁針仕事

荷十

蚊遣して浅茅がそれに似た姑

古蝶

蚊遣火の夕顔へ這ふ雨催ひ

当百

読経をやめて蚊遣を消して立ち

卯木

蚊遣火の浅間が嶽が椽に出来

時次郎

その後除虫菊の粉で灰の上に線

を劃してその一端から徐々に燃

て行くようにした時代もあった

が、一転して除虫菊入りの線香が出来たが、普通の線香と似ているので、枕元に置いて寝る時など気にするものもあり、再転して今日のような渦巻形の太い線香になったのだ。

人間

麻生 葎 乃

人間は皆生きてゐる

みな歩いてゐる

いつ鹽の水で流されるかも知れない蟻のように

○

人間はみな動いてゐる

好きであらうとなかろうと

毎日 毎日

人間が生きている証拠は

ただ動いていることだけなん

だ

タケダ薬品



激しい疲れ
神 経 痛
肩こり・腰痛
心臓病にも

▲アリナミンのもう！



上方の前句附と 川柳点

阿達義雄

(一) 寛保期における瓦竹堂 李坡評の前句附

元祿の頃から雑俳系の前句附の興行が盛んになり、その勝句を印刷に付し、小冊子に仕立て披露に用いた会所本の影し数にのぼっていたことは、既に宮田正信教授が指摘されているところである。

恐らく、この趨勢は享保を経て元文・寛保頃迄も続いたこと、推測される。

『俳諧都鳥』——元文期の京宗匠点の前句附によって、この期の前句附の過渡的現象を見て来たといえ、更に大衆化、企業化していた前句附の末流の姿を、宝暦期に近い会所本によって徴してみる必要が感じられる。

というのは、会所本が江戸の万句合の摺物に比すべきものであるからである。

寛保二年冬に刊行された『俳諧心の種』は、前句・冠句・四季句・折句等の勝番句集であるが、この扉には「奉納神明宮五千句集・寄句七千八百余吟・勝二百五十番上座・百番総馬・瓦竹堂李坡評」とあり、こ

れは如水・虎竹の清書を経た中浜連中の会所本であることは、宝暦初年刊と推定される「おきな草」(会所本の合綴)の中のもの

所本と形式を等しくしていることから知られ、特に興味のあるのは毎回前句題が非常に多く、当時、それらの前句題の過半が形式化され、同一又は類似の前句題が屢々提出されていたということである。

これらの前句題の中から屢々提出されているものを、前記瓦竹堂李坡評の前句題を基準にして、◎印をつけて示してみると、

雪 雪のちら／＼

往 行ッ戻リッ

サ◎さりとハ／＼

能 能日和哉／＼

有 有がたや偕／＼

心 心いそ／＼

幸 幸じや是は幸さいハひじや

バ ばら／＼と小鳥ばら／＼

ヨ よしやよのよしやよの中よしやよ

の

コ こん／＼と鐘のこん／＼と

キ◎きらく／＼と襖の引手きらく／＼と

ク◎くる／＼とたばこのけふりくる

／＼と

是◎是ハ偕是ハさて／＼是ハさて

浮 うきよしや／＼

星 星のきら／＼

錦 錦につゝむ秋の山／＼

雨◎雨のほろ／＼

ソ そろり／＼と／＼

蝶 蝶のひら／＼

ハ はんじやう／＼

以上廿題(冠句題の十一題は略)

右廿題の前句題の上部に記した「雪」

「往」「サ」等はその附句との照合符号となっている。

即ち、この様に前句題の多いのは、誰にも附け易いように、選択の範囲を広くしたものであり、中でも、「さりとハ／＼」

「是ハ偕是ハさて／＼是ハさて」の様な前句題は意味内容が空疎であるゆえに、どの様な附句にも一応は附くはずのものである。

右の様な前句題につけられた李坡評の附句を見ると、

雪 手の隙ハ無イと丁稚が懐手

サ いつ迄も蚊屋釣りが若女夫

サ 喰ひこぼす子供の傍で状封じ

サ 屏風からしほ／＼と出る角力取り

サ 盟から噂とんで出る人梅上り

錦 立ッ鳥の竿に研く沢の月

雪 傾城を煮ぬきにしたる風呂揚げ

能 ちる花の笠にとまりし久しぶり

この最後の三句は、天象に附けられている関係が、未だ俳諧(連句)の世界のものであり、その他の句においては、連句の雑の句から人間臭の濃い雰囲気の中へ一歩踏み出そうとする気配が感じられ、洒落とか諧謔とまでは行っていないものの、若干可笑味も認められる。

勿論、これらは、日常誰も気づかない妙所を衝いて、一脱した人々を領かせるという程のものではない。

(二) 李坡評の短句

以上は、七七の前句題につけられた五七五の附句であるが、五七五の前句題につけられた七七の附句を見ると、

是 囁くすべハしらぬ大名

サ 箒で叩く雪の珍客

廿四孝の親は無理言ひ

ク ツツサメを仕に辰ル立聞キ

いつも仏に留守させし庵ン

よってたかつて撫る新宅

思案ハ立ッてしたる傾城

誰ゾ覗くか止ンダ虫の音

コ 下駄を貰ふて子ハ雨を待ッ

ぱつとひらかぬ傘に味有

これ等の短句には、長句には見られない狙いと妙味がある様に感じられる。しかも、

これは、必ずしも前句題を俣たなければ鑑賞の出来ないというのではなく、これら七七の短句だけでも享受される微妙な味わいであり、右の「是ハ倍是ハさて」は「是ハさて」に附けた数句にあつては、この様な前句題は寧ろ蛇足の感がないでもない。

これによって想起されるものは「俳諧武玉川」の短句であつて、これはよく武玉川調として喧伝されているので、右に挙げた李披点の短句と対照してみるに、

廿四孝の親は無理言ひ

二十四孝はみんな無理喰(武一三・30)

よつてたかつて撫る新宅

雨まで替て戻る仲人 (武三・21)

ばつとひらかぬ傘に味有

腹立てさす傘のひらき過(武一六・14)

必ずしも前者が劣っているとも言われぬ。

こゝで考えられることは、前句を省略して「武玉川」の短句が優れている処から、それらの前句が単なる雑俳流の前句附ではなく、みな俳諧の前句附又は歌仙等の中から採られた短句の様に推測され勝ちである。

しかし、右の李披点の例から推すと、正体なしの長句を前句題として附けた短句にも佳句がありうるということが知られよう。

短句は長句と異なつて、具体的表現の妙を發揮し得ない代りに、生活体験を圧縮結晶させて端的に吐露するか、或は人間の感情や行為の妙点を狙つて、その含蓄性を以て人を傾かせようとするのは自然的帰趨であらう。

従つて、「武玉川」等の俳諧高点附句集の中の短句が、雑俳者の徒に句の着想や物

の見方を学ぶ範とされたり、又様々に利用されたのも当然なこと、言わなければならぬ。

京阪にあつては、俳諧前句附の中から、前句だけを抜萃して一書を成すことは、早く享保の頃から行なわれていたのに、江戸では、長句短句に拘らず、前句だけを一句として喜び迎える風潮はまだなかった。

この短句の価値が、江戸において、特に注目され、これを主とした高点句が纏つた撰集として刊行されるには、次の寛延・宝暦の時代を待たなければならなかった。

いづれにせよ、上方の雑俳系の前句附の世にさへ、「俳諧武玉川」の短句と並べられるような句が生成し存在していたことは留意すべきことであらう。

(1)会所本については、「国文学解釈と鑑賞」第三巻第七号の宮田正信氏「前句附史」参照

(2)「俳諧心の種」は昭和十五年「川柳春秋」四月号に本田溪花坊氏によって翻刻紹介されており、「俳諧大辞典」に解説されている「俳諧心の種」とは別のものである。

(3)後の川柳評万句合には、長句が前句題として出され、それに短句がつけられるということとはなかった。

(三) 延享期会所本中の前句附

延享期の雑俳系の前句附を見たいと思つていた処、宮武外骨氏が「変態知識」第十二号(大正十三年十二月刊)の世に、「近頃獲た上方の前句附」の題で、延享四年「明石人丸大明神三萬句集」の中の句を十八句紹介しておられることを知った。それには、「延享四年明石人丸大明神三

萬句集の勝句九百番は、堺の瓦竹堂撰である」と述べられていることによつて、これは前述の「奉納堺神明宮五千句集」の会所本と同種のものであると推定することが出来る。

たゞ、宮武氏は右の前句題を省いて前句だけを示されているが、これは、それらの中で、前句だけでも意味の分るもの、あつたことを語るものであらう。次に、これら

を長句と短句に分けて引用してみると、

〔長句〕

(1)おひはぎも禪はどのなきけあり

(2)文字に皺よりし病後の人瘧

(3)肩くまがきんかあたまをあぶながり

(4)竜宮の女子あたまの上に蟬

(5)丁稚がおもふ奥様よりわるいの

(6)又折もあらうと腹を立残し

(7)短氣者釘打で釘た、き込む

(8)払とも仏ともよむ十四日

(9)わけもないとこ刺るまいと出して借す

(10)歌人居ながら節季には留守

「俳諧高天鷲」の序に鶴寿軒良弘が述べている様に、泉州堺は早くから前句附の行なわれた土地であり、町人の町であつた。従つて、後に出て来る川柳点と比較してみ

ることも意味のないことでもなからう。又、右の句が、江戸で俳諧高点附句集の盛んに刊行される前の上方の前句附であつたといふ点にも興味を持たれる。

右の句の中でも、(1)(3)(6)(10)などは、後の川柳点の句を想わせるものがあり、今、(1)(2)の二句だけについて、川柳点と並べて考えてみても、延享頃の堺の前句附が、更に江戸において磨かれる余地のあつたことが知られよう。

〔おひはぎも禪はどのなきけあり
追ひはぎも成りたけ人ハころさぬ氣
〔明四・宮2〕

〔文字に皺よりし病後の人瘧
母の名ハ親仁のうでにしなびて居
〔宝十三・礼1〕

〔前句「命なりけり」
尤も、
又折もあらうと腹を立残し
などの句は川柳点にも類のない句である。
次に短句を一括して示してみると

夢ばかりでは出来ぬ告子
畳へもれし日を取りに這ふ
起せば膝をつ、むうた、ね
道理片よれ無理が御通り
折々前も見たる後見
人參代のないも天命
俵ふまへぬ白大こく
足を合して拝む女房

これらの会所本(雑俳系)の前句附も、享保の中頃から、頻りに刊行された俳諧高点附句集等の影響もあつて、長句よりも短句に反つて佳品が見られる。

このことは、宝暦初期、江戸にあつて雑俳系の前句附——万句合が余り振るわず、長句よりも寧ろ短句を主とした俳諧高点附句集の「俳諧武玉川」「眉斧日録」「俳諧童の的」「俳諧金砂子」などが続々刊行されることと何か関係がありそうである。

要するに、享保中頃から延享期にかけて京阪に活躍した松本淡々の俳諧高点附句集などの影響を受けて、雑俳の前句附の七七の短句の中には次第に佳句の見られるようになったことは、「俳諧武玉川」における短句の尊重と一脈の繋がりがあつたように感じられることである。

(筆者新潟大学教授)

柳志の句について



清水白柳

一と皮をむけば窓から乗る
気なり 柳志

「趣味も生活も一貫して日本的である。人生観や処世法の中には、俳句の師であった、かつての朝日新聞天声人語の故永井瓢斎翁の感化の大きい事を痛感している。一升瓶には二升の水は、はいらぬ事をさとして、いのちある句なんか出来るにないが、せめて柳志が此の世に生きていた事の、証拠になる様な川柳の一つ位は、遺して死にたいと思っている。」これは川柳雑誌第四四九号にのっている「不朽洞の人々」に書かれた柳志さんの本音である。好作家柳志の句を語るについて、先ずその横顔を御紹介して置きたい。

現代柳人録によると、明治三十九年三月四日生れということであるから、卯の七赤で私より二つ年長であって、貴山、文庫、徳三、一栄さんなどと同年である。不朽洞の人々に書かれているように、瓢斎翁の俳句には川柳味があったので、その感化を受けて今日の柳志として川柳に活躍する素質が培われたのであろう。昭和二十五年たまたまBKの放送川柳に入選した事から川柳に開眼したのであって、その素質を見込まれて昭和三十三年十月川柳不朽洞会に推せんされている。当時は本名、本多省三で作品発表をされているが、三十四年一月から柳志と改号して居る。当時は西成支部で盛んに活躍して居られた時なので、支部長の

梅志の一字を使って柳志にしたのだという事だがその当時の梅志さんの川柳に対する熱意にほだされて西成支部の世話をして居られたようである。三十六年九月には川柳雑誌の選者として推せんされたのもその力量が認められたからに外ならない。また三十八年五月号から柳志寸言を書かれ、多くの読者に深い感銘を与えて居られるのである。柳志寸言にも見られるように、言いたい事をズバリと言っている性格はそのまま句によって到るところに見ることが出来るのである。

1 職場結婚三人産んでまだ辞めず
2 アブストラクトさかさまのままで売れたらし
3 南極の犬は死ななきや帰れない
4 新らしい大臣の名で許可が下り
5 許容量ぎりぎりと言う雨にぬれ
6 台風へ都市よ貴方はもうかった
7 信仰をせん自由をも認めてや
8 家建ててから友達はよりつかず
3456の句に見るように社会相といったものに関心を示した句が多いのは、身辺雑事よりも句の持つ巾が広いのを意識してのことだと思ふ。併し78の句のように身辺を詠んでも、言いたいことを言っているのである。

12の句は世相の諷刺だが深いものを持っていると思う。また以前にも問題になった事のある、漢字ばかりの句を何句も作っている。それは

刑事室前科三犯男前
火事花輪祝電格立候補
家内安全無病賽銭五円也
絶対反対断乎斗争社会党
というのであるが、刑事室の句はもう一つ感心しないが、火事花輪や絶対反対の句には鋭い諷刺が溢れていて面白いと思う。ここにも世相への抵抗を見ることが出来るのである。家内安全の句は身辺を詠んでいるが、苦笑いがあると思う。世相の中でも物価の問題は、一番身近かな事なのである。その句を見よう。

十円の葱を見せあう市場籠
百円のキャベツが軽い市場籠
又上るうわさで背中流し合
い

この句には柳志としての踏みこみが足りない。誰れでも詠むことが出来る程度ではないかと思つた。

ただ三句目の銭湯の雰囲気を描くのいい句語を使ったのが柳志らしい処である。

明治の人間としては宿命とも言

暑中お伺

旋風機に蚊帳裾

踊る旅の宿

諫早市裏山風致地
千理眼堂内

川岡 霊眼子

電話一四三七番

岸和田市野田町一七五
高橋 操子
電話岸和田貝塚②六六三一

岸和田市上町三六
内藤 きさ子
電話岸和田貝塚②八〇七九

支 部 野 部 阿 倍 社 柳 川
今西 章雅
泉 竝悦子
井上 つる子
本多 柳志
金井 文秋
河井 庸佑
桑田 嘉代子
菊沢 小松園
松江 梅里
宮尾 あいき
小川 恒明
辻川 喜仙
柳生 野菜

事務所 阿倍野区松崎町3...10 (松江梅里方)

える旧さを諷刺によって脱皮して
いるのは偉大であると思う。新ら
しからず手の届く範囲でのこと
であるだけに嬉しいのである。

へクタル結局坪で駄目を
押し
昔吹いたラッパで嫁ぐ紙芝居
大臣を呼び捨てにしている
機嫌

寛寿郎に似た天皇で親まれ
勲章を吊って戦争などしな
や

回願十五年
大本營日本一の嘘がばれ
オリンピック

日の丸の良さを代々木で見
直され
論議などどうあろうとも紀
元節

へクタルの句や寛寿郎の句、
そして勲章の句などにはこの作者
の面目が躍如としていると思うの
である。

政治にも触れて余生を不安
がり
すし詰めのまま急行に追い
抜かれ

でたらめな恋婦人科の世話
になり
手ざわりはどうせ買えない
生地と知り

風船もしばや背中の子も眠り
看板は下手なめし屋でよく
はやり

おとなりが空家になつてい
る寒さ

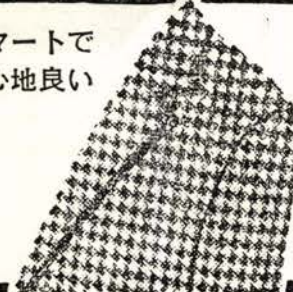
この句はどれも課題吟であるが
課題吟だと言つてなげやりな作句
をしないのが良心的だと言うので

はない。真剣に題に取組むのが本
当の姿なのだから、このような諷
刺に富んだ句が多く生れているの
である。ここにも柳志が生きてい
るということが出来る。また政治
の好きな作者には多くの政治を詠
んだ句がある。

当選をしたら汚職も知つて
はり
休会中はしゃべり本会議は
眠り
窓口は人より判コ重視され
一票をネダル賀状かルビを
つけ
退官へ業者昨日の目に非ず
我党に得な雑音なら聞こえ
政治的笑顔で下りて来る羽
田
政治的花輪が歩道せまくす
る
何を売るつもりか香具師の
政治論
などいくらでもあるが、その頂
点にあるのは
日本の政治あちらへ聞きに
行き
であろう。この句は大阪市民文
化祭川柳大会での市長賞受賞句で
ある。

最高裁まで来ても罪人と思
とらず
随筆をあぐらで書いて寝て
読まれ
天下り履歴書程に間に合わず
駅までの五分が遠い分譲地
就職へ無力な父の判が要り
芦屋にも質屋があつた裏通り
サイン帖嫁して従う文字で
なし

スマートで
着心地良い



GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

子にも欲し親にも欲しい修身科
仏壇を退けてテレビの場所
を決め
満よりは三つも若い定期券
男子一生の仕事と子らは見
ておらず
バチンコの手で夕立をたし
かめる
内風呂が冷めてしまうた事
件記者
いくら書いてもきりが無い程句
が多いのである。昨年お嬢さんを
嫁づけられて
嫁った娘の余香のへやへ立
ちつくし
と親の気持を詠んで居られる
が、最近よく旅をたのしんで居
られる。そのたのしさの中にもこ
んな句がある。

高浜海岸
ポスターはざこねさすとは
書いてなし
大和路の秋
月光菩薩さまもバリへ行き
たかろ
和歌浦八景
値切る気の高苔の青さをか
がされる
最後に時事吟を見ると三十九年
度に
又一つ地蔵が増えた鶴見駅
茶毘の煙三池の月もけふたかろ
などを見ることが出来るのであ
る。

社会諷刺に、世相諷刺に、そして
ウィットに富んだ句を今後も多く
見せて頂くことを期待して、拙な
い文を終りたいと思う。

川 雑 淀 川 支 部 大阪市東淀川区十八条町一ノ二一				福井野迷路 まっ二つと思えど 大和の大西瓜	
木村水洞	小島孝夫	平田三十郎	早川清生	志水礼司	坂田東洋男
西森花村	高 峰 柳 児	長野県須坂市太子町	魚 住 満 潮	大阪市西成区玉出本通四ノ六	虹川柳倶楽部 新岡 天 子 電話(唐津二七七八)
電話 271 三五〇二番	大阪市南区巖谷中之町四 電話 271 三五〇二番				

一路集

選者
尼 綠 之 助
西 森 花 村
小 西 雄 ヲ



返済

尼 緑之助選

返済か汚職か迫る曲り角 真砂
少しづつ返済たんびに励まれ 静水
返済を迫る泣きの手おどしの手 どんたく
生前の御恩返しに墓掃除 句楽坊
日月の早さへ返済追いつけず 伊津志
返済をせねば貰えぬ貸があり 健太郎
借金を返さぬ嘘を見破られ 滋雀
四五日の金が一年越しとなり 木魚
返済の期日を書いてある不安 李朋
返済へ妻の内職まだ続け 幽谷
返済が今日家計簿へ無事にすみ 秋月
返済が出来ず一升提げて行き 藤波
返済もせずに企む次の借り 野迷路
返済の期限を明日に借り歩き 初甫

返済の利子も隠居みんな取り ろ亭
返済の催促酒に手伝わせ 李鳥
高利から借りて高利の利へ廻し 宗太郎
真実のこもる半金返しに来 淀月
返済を迫られてる膝頭 涼人
貰うた金が育英資金返さない 章雅
元利とは別に律義な物を添え 愛鳩
ウインクへ返済しとく投キッス 春巳
見えすいた嘘で返済せぬ気なり 隆史
泣き落とし戦術で待つ返済日 雄々
返済もせずに大きなホラを吹き 雄声
返済は出来ず裏口から入り 保夫
返済を迫る笑顔をもちあまし 千翁
返済のもう一と息がしんどすぎ 惠二郎
法の裏知って返済もめており 新雪
返済をこたわる役を娘にさせる 隆子
返済日迫って智能犯となり 晃男
渉らぬ返済ボスの顔を借り 井蛙

返済を棒引にするプロポーズ 芳仙
返済が終れば居るかも云わず 不二
失業へ返済期限容赦せず 代仕男
返済日近ずき長い手紙書く 十九平
又借りに行く気で返す紙幣数え 正夫
泣いて借り泣いて返済日を延ばし 同

佳作

借金と差引ゼロの退職金 どんたく
春斗の返し処分で又斗争 松風
利子つけて返すどころかとぼけられ 木魚
請求のない返済に身を削る 千翁
当人は貰った気でいるのに困り 弘朗
返済がすむと住宅雨が漏り 李鳥

人

返済どころか肉体までしやぶり 可住

地

借金を返したつりのコップ酒 春巳

天

返済が月給袋につきまとい 初甫

軸

礼言うてこれで裸になる返済

イミテーション

西森花村選

イミテーションそれさえ母はよう指さす 木魚
イミテーションどつか個性が欠けており 代仕男
イミテーションをそれでだませる妻でよし 可住
イミテーションの方が日数よけい掛け 健夫

色紙短冊
書画用品

大坂戎屋

丹月堂

電中セニセニ

とは知らずイミテーションの派手な柄 伊津志
イミテーションとちらと云えぬ双生児 章雅
身分不相応イミテーションとしか見えす 十九平
へそくりが模造に又も引かかり 弘朗
この指輪イミテーションかと感心し 松風
本妻の方のダイヤがイミテーション 句楽坊
婚約は本指輪はイミテーション 正夫
縦しニセであらうと由緒ある家宝 八九寸
宝石店出てイミテーションそとつけ 隆夫
呉れようははじめはイミテーションかと思ひ 愛鳩
お値段のはかは変らぬイミテーション 雄々
PTAイミテーションを派手に見せ 同
イミテーションでよいとぬくらしを知っている 雄声
落したら落したで済むイミテーション 保夫
番台へ預けたけれどイミテーション 信二
イミテーション金に似合った地金出し 井蛙
大衆向きイミテーションが値上りし 秀峰

檸檬 (れもん)

新刊

著 橋 高 薫 風 著
序 麻 生 路 郎 序

★れもんのように天地の純真を満身に漲らせて川柳に精進したいと願う著者が、「有情」に次いでさらに個性に磨きをかけた。10年の川柳生活を記念して世に問う自選句 300 句の知的な抒情は、れもんの滴りそのものである。

定価 500 円 (送料共)
A 5 版 167 頁

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地
電話大阪「671」六〇八一
振替口座 大阪七五〇五〇番

上方語源辞典

前田 勇 編

多彩で洒落性のある魅力溢れた上方語

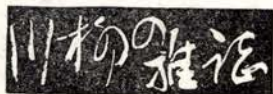
明治・大正・昭和三代における京阪市民のこぼれを日常の会話や談話、落語や漫才、隠語・方言の中から 7,300 語を見出し語として掲げ、いちいちその語義・語源・語史をさぐった興味ある語源辞典

定価 1500 円

発行所 東京堂

東京都千代田区神田錦町 3 の 5
振替口座 東京 270 番

柳 誌



459 号

川柳の最も権威ある雑誌

佳 吟

イミテーション 掘出しものの口に乗り
イミテーション らしく光って首飾り
よく真似ているとも言わずと置き
イミテーション かぶりつきたいほどの出来
出来合いのきれいな方がイミテーション
十代の恋イミテーションの贈り物
イミテーショントレードマーク 一字交え
純情がイミテーションと念を押す
イミテーションと分つてからの冷たい目
屋台店イミテーションのカツ揚げ
洗濯の手からイミテーションの石を抜き
あんまり大きいからイミテーションかも知れず

同 隆 子
千 翁
旭 峰
通 隆
幽 谷
同 朋
李 朋
同 鳥
同 鳥
惠二朗
代仕男
健 夫
万 竿
鶴 丸
宗 太郎
凉 人
井 蛙
淀 月
惠二朗

レ ベ ル

小西雄々選

はんものとならないわというお世辞 同
オムレツのこうも違った蠟細工 滋 雀
泥棒の方がイミテーションだと見抜き 健 夫
白痴美へイミテーションがよく似合い 宗 太郎

妻のかたみ僕が贈ったイミテーション
レベルなど問題でない恋が出来
文化人のレベルへ眼鏡かけカメ下け
レベル以下でも進学へ親の夢
お寺はんが昔のレベル赦さない
町内のレベル心得ている幹事
前祝したがレベルに達しかな
レベルが違う夫婦で仲がよし
大臣が出てから母校のレベルあげ
先生のレベルを生徒に評価され

同 隆 子
千 翁
旭 峰
通 隆
幽 谷
同 朋
李 朋
同 鳥
同 鳥
惠二朗
代仕男
健 夫
万 竿
鶴 丸
宗 太郎
凉 人
井 蛙
淀 月
惠二朗

重役の趣味にレベルを合わせるとき
生活のレベルを下げて立ち直り
団地族高いレベルに疲れ果て
学歴のレベルがきめる初任給
トップレベルの手筋と易者首かしげ
凡人に教育テレビ眠くなり
飲屋にもレベルがあつて面白し
レベルなどあはらし一億貯めた人
教養はレベル以下だが七光り
外観でレベルの甲乙つけている
親の欲頭のレベル考えず
クラブ振るトップレベルのダンク
いい加減レベル落して私立受け
同窓会レベルを意識して卑屈
親馬鹿へ子の成績が腑に落ちず
体格も知能もレベルでいる気楽
酒の味いつのまにかレベル越し
老嬢の自尊レベルをまださげず
私を忘れてレベルばかり言い
レベルの高い附屬へかよす親の見得
はれられた女のレベルに嫌気さし
人は人は私というレベル

李 鳥
勝 子
井 蛙
光 郎
章 雅
涼 人
淀 月
信 二
雄 声
歌 子
たけお
春 巳
万 竿
李 朋
どんたく
見 男
松 風
十九平
千 翁
鶴 丸
新 雪
杏 花

レベルなどどうでもよいという二人 旭 峯
レベル以下と見られたい胸を張り 惠二朗
金持もレベルに合せる町内会 村主 茂 人
家計にもレベルを作つて夢を抱き 松 風
ネクタイの柄にもレベル疑がわれ 李 鳥
憲法のレベルに遠くさんま焼く 章 雅

コンパクトレベ以下とは思つてず
学歴の有無をレベルの尺度にし
すすくとレベルを越した娘の背丈 代仕男
生活のレベル電化を誇り合い 井 蛙
初婚省レベルの高い話題出し ろ 亭
使う身と使われる身の差を感じ 弘 朗

生活のレベルを市場籠に乗せ 宗 太郎
ライバルにレベル合わしている苦勞 杏 花
死んでまでレベルが違っている花輪 愛 鳩

母さんもレベルを競う参観日

人 地 天 軸

柳界展望



鳥ヶ辻川柳会青葉時行・写真前列向つて右より雲子・役食子・豊乃
草右・竹庭・後列一人おいて竹春青・愛論・行男

句会

▼本社八月句会は路郎主幹追悼句会として六日(金)午後六時から千日前電停東入の自安寺で開催する。不朽洞会員は言うに及ばず柳縁につながる柳人諸氏の多数のご参加を得て、偉大な巨匠の生前を偲び冥福をお祈りして戴きたい。お誘い合せの上のご出席をお願いする。▼七面短詩型文学クラブ川柳部句会(和歌山市)は七月七日(水)午後五時から北の新天地朝千鳥で開催。清水白柳氏代行。▼南海電鉄川柳会(大阪市)七月句会は十五日(木)午後六時から難波の親和クラブで開催。▼川維岡山支部七月例会は十七日(土)

岡鉄クラブで開催。「麻生路郎先生のご逝去をここからお悔み申し上げます。先生がご生前岡山県のために岡山支部のために尽くされて来られましたご功績に對し一同感謝の外はありません。ご冥福をお祈りいたします。▼川維備前支部(岡山県)七月例会は十七日(土)浜田久米雄居で開催。「先生のご逝去を一同ここからお悔み申し上げます。先生がご生前に備前支部にお寄せ頂きましたご好意の数々は、「ふるくとも僕には仁義礼智信」の句碑とともに永久に岡山県吉水町から消えることはありません。ここに謹んで哀悼の意を表し先生のご冥福を祈ります。▼和

気川柳会(岡山県)は七月十一日の句会席上から路郎主幹のご冥福を祈られた。▼川維下関支部一杯水川柳会麻生路郎追悼句会七月十八日(日)市内長門一ノ宮福王寺で開催。▼明和川柳研究会(西宮市)第九十句会は麻生路郎先生追悼句会として七月十一日(日)午後一時から鳴尾公民館で開催、席題に命・初志を出題して故人の偉業を偲び黙祷を捧げて冥福を祈られた。▼明和川柳研究会・川鉄川柳会・甲南川柳教室合同吟行会は六月二十七日(日)京都妙心寺退蔵院へ。主幹のご快癒を祈念した寄せ書を頂戴した。▼三田村湖洲氏増築祝賀句会から六月二十日主幹の快癒を祈る寄せ書を頂戴した。▼堺市民文化祭市民川柳大会は十一月十五日(日)午後一時から阪堺線大小路電停下車西へ半丁北入る府立堺労働会館で開催。兼題、紅・新人・日本晴・コーヒ、席題二題当日発表、投句は各題別葉書に三句ずつ明記、住所氏名雅号を記し十一月十日迄に堺市瓦町堺市役所内堺市教育委員会堺市民川柳会係宛。▲第十六回中部地区川柳大会(名古屋)は九月十二日(日)正午から中日新聞社四階ホールで開催。兼題、返事・願い・横断・ゆっくり・洗う、各題三句、投句は百円封入の上八月末までに名古屋市中区大道町一ノ三〇中日川柳会事務所宛。▼かがみ川柳会(岡山県)八月吟行は二日(月)午前七時三十分から勝山町神庭の滝

消息

へ。▼川維玉造支部(大阪市)七月句会は十日午後六時から大阪信用金庫玉造支店で開催、特別に「路郎先生を悼む」句を作り故人に捧げられた。▼第三回全四国川柳大会は八月二十二日(日)午前十時から徳島市西山手町徳島県博物館五階ホールで開催。兼題、山・揃う・宝石・逆転・愛情・顔・捨て石・手紙、特別課題、ぶどう饅頭・徳バス、兼題は二句、特別課題は三句。投句は出席者に限られている。▼麻生路郎主幹は病氣療養中のところ七月七日(水)午後九時二十分逝去、九日(金)午後一時から自宅で密葬を十八日(日)午後一時から三時まで受念寺で川柳雑誌社及び川柳不朽洞会の合同川柳葬を執行、大阪市長中馬馨氏をはじめ参列者五百余名、弔電二百数通にのほり、盛儀であった。

▼岸本水府氏(大阪市)は過労による貧血と胃潰瘍で五月十三日城東病院に入院、六月十一日切開手術を受けたが、六月二十日付「おなじ病床にあり懐旧の情切々。ご快癒をいのる。盟友路郎君」▼中島生々庵氏(大阪市)は七月十八日の路郎主幹の本葬式に参列、霊前でも下生を代表して、指導者亡きあとの不朽洞会は、川柳界発展のため力を結束し、路郎主幹の身体を踏み越えて大行進を始めようと力強く覚悟の程を披露された。▼正本水客氏(大阪市)から、「退院されて一ヶ月半、じつと安静にしていることが先生にあってどんなにつらいことが胸にしてみてる様に思いますが、くれぐれもご自愛の程を。でも意外とも思えるほど雑誌が順調に出ているのは編集部の非常な努力と、先生の陣後指揮のたまものと感しく思っております。▼竹内祥二氏(出雲市)は「路郎先生のご逝去に對し、ここに謹んで深く哀悼の意を表し、只ご冥福をお祈り申し上げます。」と弔意を寄せられたが、全国から多数のご挨拶を頂戴している。お礼申し上げます。▼西いわを氏(大阪府)は昨年三月と五月に結婚をされた令息と令嬢が相次いで赤ちゃんをもうけたので、にわかに二人の祖父と

黄銅六角ボルトナット及び特殊挽物全般

合資会社

西出螺子製作所

大阪市天王寺区宰相山町142

TEL(761)3452~4

夜間(762)4408

金 泥 集

課 題「鍵」

麻 生 菟 乃 選

アパートの合鍵一つはヒモが持ち 阿 茶
 神棚へ鍵を預けて安心し 同
 ホステスに合鍵貰うてうろたえる 一 栄
 未亡人心の鍵はあけさせず 同
 鍵番号忘れて自転車かついで来 清 子
 鍵嫁にゆづつて余生趣味に生き 同
 鍵っ子の淋しさおませな口たたき 醉 夢
 今留守と云わんばかりに鍵をかけ カネ女
 とる物もないと云い／＼鍵をかけ 同
 辞令と共に倉庫の鍵をあずけられ きさ子
 粉失の鍵を探して小半日 同
 鍵っ子は大人の面相を鋭く見 千 夏
 自転身に鍵つけたまま盗まれる 勝 子
 鍵をみな嫁に渡して平和な日 周 甫
 鍵の手に曲った所で追いつかれ み よ
 鍵っ子の日曜ババの膝ママの膝 花 梢
 鍵よりも猛犬に留守たのみ行く トメ子
 全財産一つの鍵に預けとき みさ子

なられ嬉しい悲鳴をあげておられ
 る。▼弘津柳慶氏(広島市)は勤務先の日本専売公社広島地方局内にも川柳句会を発足させ、活潑な川柳活動を促進させておられるが、社内報「ひろしま」の随筆に応募し、新年号、百号記念号で特選と二席にそれぞれ入選し、文才にも確かなところを見せられた。▼小西雄々氏(米子市)は七月十日、十一日の両日宮島で開催される全国鉄川柳大会に出席し、久しぶりに柳友と歓談出来るのを心待ちにしておられる。▼辻川喜仙氏(大阪市)は五年前の白内障手術以来視力が減じ、ものを書くにも強度眼鏡を用いられるが二十分と持続出来ず、軽度へと変える見えぬ由、年ですなあと悲嘆をかこておられる。「頑張れど齢に勝てずと知りながら」▼八木摩太郎氏(堺市)は堺市出身の文筆人形遣い桐竹紋十郎が四月二十七日人間国宝となられ、その祝賀会が堺市長、堺市議会議長、商工会議所会頭らの主催で七月十六日午

後二時から堺市民会館大集会室で開催されたので、堺市文化団体連絡協議会常任理事として出席、祝意を表された。▼阿部柳太氏(富田林市)から、「富柳会六月句会席題選挙の句が、朝日新聞紙上並びに同市公報「市政だより」に掲載され、参議院選挙を前に市民の関心を集め句会の存在を認めさせました。▼川岡豊眼子(諫早市)は七月十日講演と靈感披露実演のため尾張一宮市へ出張された。▼山田季賛氏(高槻市)は六月二十三日茨木市のサッポロビール工場の見学というリクレーション行事に参加、「見学に来てビールの飲み方教えられ」又、六月二十六日には職務の土木工事の材料に使用される鋼材の生産工場見学のため姫路の広畑、富士製鉄へ。

▼西いわを氏(大阪府)二男隆二氏は六月十二日赤塚久兵衛氏の媒酌により樋田敦子さんと良縁整い、以和貴莊で華燭の典を挙げられた。お慶び申し上げる。
 柳 誌
 ▼「関学川柳」の創刊号が昭和四十年七月一日関学川柳会から発行になった。頒価五十円。若い大学生柳人の機関誌の永続発展を期待している。

和四十年七月七日島根県立隠岐高等学校川柳クラブから発行された。四十回の句会の佳吟の集大成で今後の若い柳人グループの成長に期待がかけられる。

「湯のように流れる鉄を眼にきざみ」そして七月一日付辞令で大阪第二工務局新大阪工区へ転動された。▼橘高薫風(大阪市)は七月一日桂離宮を参観、緑の雨の降り止む中を逍遙して、日本伝統の粹に浸りながら、昔の人の靈魂をそここで感じた。「眼つむれば絹ずれ妙に賞花亭」

▼富岡淡舟氏(堺市)は左記へ移転された。堺市大豆塚町二丁五十一番地浅香莊苑住宅四十八号▼植村客遊子氏(神戸市)は神戸市須磨区松風町三丁目二番二十六号へ。高寺和郎氏(堺市)は堺市福田一〇三七の三
 住居番号変更
 ▼高須啞三味氏(東京都)の住所が七月一日から改称になった。東京都港区西新橋一丁目二番二二番
 ▼田中狂二氏(堺市)の住居番号が変更された。堺市今池二丁目二番十四号▼

不朽洞会から

☆笹野昭三氏(岡山県)は家事の都合により六月限りで退会。

暑 中 お 伺 い 致 し ま す

川 婦 人 友 の 会 連 絡 事 務 所

山 川 阿 茶 大阪市南区二井戸町二三
 麻生 菟 乃 山 川 阿 茶
 中 島 小 石 太 田 良 子 高 橋 操 子 西 出 一 栄 酒 田 清 子 藤 村 八 子 内 藤 き 子 小 西 富 士 子 八 木 徳 子 市 場 カ ネ 女 吉 川 悦 子 置 田 ふ じ 藤 岡 花 梢 小 林 ト メ 子 林 春 栄 西 村 梨 里 宮 尾 あ い き 岩 田 美 代 森 川 す み れ 西 川 み ち 子 鳥 取 周 甫 天 正 み さ 子 三 井 醉 夢 児 玉 し げ 子 坂 川 有 子 船 津 千 夏 稻 本 凡 子



大萬川柳に就いて

松江 梅里

大萬川柳は昭和二十六年三月創立以来十四年四ヶ月回を重ねること実に百七十二回これはなんと申しても路郎先生選と言う金看板の賜物である。これに惹かれて集う同好の志全国に二百数十名を有する会員を得て今日に至れる。その間どのような障害にも耐えられ自ら選句して頂いたことは全く頭がさがる。殊に這般病に仆れられ日赤病院に入院され絶対安静面会謝絶の最中に於て大萬川柳の選句をして下さったことはほんとうに感激の外はない。私が例の如く句箋に一枚一句ずつ清記した五百句余を臥床の中に選句され没句はベッドの下へ捨て入選句のみ枕元に残され、偶々私がご病床をお訪ねした際ベッドの下は没の句箋が派手に散乱していたので吃驚して拾い集め、先生ご無理をなさらぬようにと申し上げると大萬の句は僕も楽しんで選をしているから身体には障らんよと仰せられたので思わず涙がこぼれ、全く返す言葉もなかった。第百七十一回の兼題「小切手」の選句をされたときのことである。枕元の入選句は更に天地人を選んで後便

でとのこと私はその没句を拾い集めて持ちかえり自分の句がその中にあるか否かを克明に調べて見ると二句入選していることが解った。どうせいつもの平抜きだろうと思つていたところが結果は天位地位という私としては路郎先生の選に於てこんなことは全くはじめての終りという実に不思議なことで天地が覆えることが起るかも知れぬ先生に百年のことがなければよいがと内心お案じ申して居ったことが今となつては不吉な予感が當つたことだと思つて居る。第百七十二回の兼題「真つ先き」の選を最後に遂に巨木の仆れるが如く昭和四十年七月七日七十七才の天寿を全うされ永遠の旅につかれたことは返す返すも残念至極と言ふ言葉を以つてしても足りない。実に悲しいことである。先生の川柳に生命を賭けられた六十一年間の川柳生活に遺された偉大なこの足跡こそなん人も真似ることの出来ない功績である名門「川柳雑誌」も先生の生命と共に終刊されることはご遺志とは申せまことに痛惜に堪えない次第である我々門

下生としてこの遺業を後世に伝えることが責務であり一慰霊であり報恩の一端でもある。「川柳雑誌」の名は消ゆるとも不朽洞会は依然として存続され、近く柳詠の名称も新らたに発足されるべく目下常任理事会に図り種々協議準備中である。就いては此際大萬川柳も一応終止符を打つことにしてやがて生れてくる新しい柳詠と共に再登場させて頂くことを約束する。既に到着している兼題「割り込み」は再出発の第一回の兼題としてその時まで大切に保管させて頂く。先生の計がひとたび伝わるや大萬川柳はどうなるのか今後の行き方等に就いて種々ご意見やご指示をうけ是非善処して続けてくれとのうれしい声と激励の言葉を頂いてほんとうに有難く存じて居る次第である。会員の皆さんに厚く御礼申し上げると共に必ずご期待に副うべく努力することを誓う。七夕の日を路郎忌として永遠に

梅里 合掌

アイデアとは

こんなものか

河村 日満

田植の手伝いをしている妻が、まだ起きるには少し早いところから、小用に立った私に凍豆腐を水ひたしにしておくことを頼んだ。

いつもなら「そんなことはお前がしろ」とばかり、また寝間へ入り込んでしまふのだが、「疲れているだろう」という労わりの気もあって、ハイハイと炊事場におりた。目指す鍋は大小いくつもお尻をこちらに向けてビカビカ光っているのですぐ目についた。次に鍋の蓋を探す。勿論これも蓋掛けというのか、段々になった整理金具に順序正しくかけられているので、すぐ目についたのだが、手に取ってみておどろいた。四、五枚ある蓋の全部が全部にツマミがない。煮物をした時などはどうするのだろうか、炊事係の妻や娘に同情をしなが、ツマミのない鍋の蓋をしたのだが、もう寝る気にもなれず、洗顔することにした。

丁度この朝の練歯磨は、使命完了しくしておさらば、という状態にあった。それを私は、このチューブに、更に最後の動機をさせるべく、口金の中の部分の歯磨を、丹念に絞りあげたのである。この時のチューブの状態が、私にアイデアを生ませてくれた。

口金のオネジ、メネジを利用すれば、立派な鍋の蓋のツマミが出来るではないか。鍋の蓋の穴も丁度よければ、チューブの口金の太さも穴にぴったり。なのである。

この時ばかりは、妻も娘も、私を見直してくれた事を書き添えておく。

暑 中 お 伺

大 萬 川 柳 会

大阪市阿倍野区松崎町 3 の 10 松江梅里方



本社 七月句会 (大阪市)

7月9日 午後6時
会場——千日前 自安寺

一 図らずも、故麻生路郎先生、ご密葬の日とカチ合った七月の本社句会は、とても淋しいものになるだろうとの予想を裏切り、開場と同時に、日ごろの常連に加うるに、久しぶりの古豪、初出席という新鋭など、多数の参加を得たことは望外の喜びだった。

本日は柳話を取り止め、代るに若本多久志氏より、路郎先生ご逝去までの経過、本葬の件、先生のご遺言により、「川柳雑誌」は九月追悼号を以って一応廃刊のこと、などにつき詳細なる説明があった。

このあと、川維同好有志の今後の在り方について発言あり、「川柳雑誌は廢刊されても、毎月の句会は引き続き開催すること」並に、「改めて、川柳雑誌に代る、新柳誌発行の意あることを表明」参加者の意を求められたところ、満場異議なく、拍手を以ってこれに賛同す。これが具体策については、後日の協

議に譲ることとして、一先ず同氏の話を終った。

次いで、席、兼題の披露に移ったが、黒リボンの額の中から在りし日の路郎先生の温顔に見守られつつ、しめやかな中にも愉快な楽しい一と時を持つことが出来た。

最後に参会者全員、故路郎先生の安らかなご冥福を祈念し、暫し黙祷を捧げ九時前、静肅裡に散会す。(静馬)

出席者 川花梢、すみれ、白溪子、たつみ、圭井堂、静馬、専翁、誓二、潮花、孚彦、弓彦、すゝむ、いさむ、よしを、滋雀、柳宏子、賀峰、中性尼、文秋、一栄、圭太、清人、野菜、あいさ、梅里、柳志、古方、恒明、珠笑、舟遊、双葉、痴亭、トメ子、市郎、多久志、一舟、柳太、吸江、形水、榮、薫風、静波、野迷路、金三、白柳、貴山、梅志、美房、与呂志、句楽坊、有子、史葉、小松園、満潮、季賛、幸子、童子、宏子、

兼題「氣前」 川村好郎 選

見てくれの氣前と読んでるマダム 真砂
氣前よくきつたチップを頭割り 半月
氣前だけ変らず破産しても派手 貴山
氣前よくくれた石器の置きどころ 圭太
左り前かくす氣前を見すかされ 柳志
お坊ちゃんと値路されている氣前 古方
氣前よう貸す氣前ならば借りに来ず 一舟
氣前よくビール溢れるコマーシャル 市郎
氣前ようライバル意識してチップ 滋雀
氣前のようにと惚れたとたかりに来 梅里
氣前よう晩酌も出るボーナス日 よしを
氣前よく飲ませた後が金を貸せ 専翁

おだてたら羽目をはずしてくる氣前 白溪子
氣前いい噂でバレた使い込み いさむ
氣前よく奢って会社に付けておき 吸江
氣前よく飲ます出馬の肚が読め 梅里
氣前よくおごつてくれたが氣にかかり 与呂志
氣前より親は氣立ての方すすめ 弓彦
氣前よく出したことから足が付き 梅里
恋人にだけは氣前がいい財布 李用
氣前よき帰りは工面の胸算用 弓彦
酒飲んだ時だけ氣前のよい親父 柳宏子
借りたのは氣にせず氣前よう使い 文秋
バツバツと費つてみせてふられて居 痴亭
氣前よう破産の方へ手を上げる 小松園
供養灯へ貧者の氣前美しく 真砂
シャツは買いいしがりやが氣前よく 好郎

兼題「スーツケース」 友淵貴山 選

スーツケースまだ故郷へ去る氣配なく 章雅
スーツケース婦警に家出見破られ 同
羽田立つスーツケースの二重底 真砂
スーツケース真似たが中味真似られず 一舟
スーツケース男に持たし旅なれる 花梢
明日の旅スーツケースのふくれよう 榮
出迎えてスーツケースは母が持ち 句楽坊
スーツケース舞台化粧のままでさげ 潮花
旅なれたスーツケースのよくつまり 柳宏子
大金の入ったスーツケースを枕にし 梅里
スーツケース一つで押かけ女房くる 文秋
スーツケース失意を入れた一人旅 舟遊
スーツケースチャクラの開るまでは入れ 金三
スーツケースおしめ一杯若い母 柳太
出張のスーツケースは未だ熱海 痴亭
死を急ぐスーツケースと思われず 恒明
スーツケースきれいな人と夜の汽車 市郎
スーツケースまさか家出と知らなんだ 恒明

スーツケース二ツ揃えて置くホーム 静波
土曜日のスーツケースはあやしまれ どんたく
袈裟詰めたスーツケースでスクーター 滋雀
スーツケース僕が持つうちが持つ 榮
傷心をスーツケースに詰める旅 圭太
スーツケースのしみが氣になる鹿島立ち 古方
手掛りのスーツケースの頭文字 柳宏子
若さ一杯スーツケースに入れた旅 梅里
スーツケーススゴム製品も入れた旅 多久志
スーツケース預けてすぐに盆踊り 章子
スーツケース睡眠薬も入れた旅 多久志
スーツケース膝に集金旅行なり 舟遊
スーツケース忘れてせわしい男 賀峰
スーツケース旅なれた渡ししょう 榮
色とりどりのスーツケースも若い肌 与呂志
スーツケース軽いが夢の大き旅 一舟
駅弁を呼ぶ間もケース手放さず 静馬
スーツケース都会のこわざ知らず着き 恒明
スーツケースネクタイだけの代り入れ 貴山

兼題「蜂」 橋高薫風 選

蜂の巣へ宇宙人ほど着て向い 隆子
降り続く雨に蜂の巣も静か 圭井堂
蜂の巣をジッと見ながら水をやり 弓彦
人を刺す蜂のころとバラの棘 舟遊
宵の灯へ蜂が疲れて迷い込み 潮花
蜂の巣が空になるまではつておけ 弓彦
刺してやら潰したろ今静中動 野迷路
蜂蜜の甘さははるかな母の胸 滋雀
梅雨晴れ間蜂の行方を見ていた 古方
働き蜂に似た父の死を悼む 梅里
捨て小舟小さく蜂が舞うて住み 白溪子

蜂刺したぐらいと男の子はあられ
分校の理科に蜂の子育てられ
恋女房へ働き蜂の梅もなし
蜂をさえ殺せぬ歳になりはしめ
刺そうとも刺さぬ蜂まだ決めとらず
軍神の家蜂の巣に守られて
蜂蜜の甘さ汚職がまだつづき
蜂の巣をついたように散ったデモ
蜂の巣へ採集の子ら立ちつくす
蜂の行方眺めて娼婦故郷想う
とときの話蜂の巣ついたよう
人間のずるさ密蜂知りはじめ
ハイヒール蜂が服着て歩くよう
蜜運ぶちっちゃな蜂に養われ
嗚呼忠臣楠氏之墓の上に蜂
蜂の巣の暮し年中なか干し
女王蜂明日を忘れているポーズ
蜂の巣をついた奴は知らんかう
働き蜂ども一人の部屋を持ち
雨漏りを直しに上り蜂を追
蜜蜂に君は似給う蜜と剣
悄然と立てば蜂にも無視される
蜂の憩むは落武者に似る
兼題「振る」 後藤梅志 選

美房 柳志 多志 一舟 野迷路 主太 滋雀 清人 静馬 中性尼 恒明 滋雀 小南子 柳志 賀峰 市郎 恒明 与呂志 静波 白柳 野迷路 珠笑 薰風 隆子 繁太郎 章雅 舟遊 賀峰 清人 梅里 静馬 柳宏子 静馬

握らせる分もソロバン忘れない
赤チャンの両手しっかり垢握る
考えておくとはにぎりつづす吐
実印も鍵も握って浮気され
手を握るくせに指名もせずに去に
柔かく握り誠意を疑われ
銅銭を握ったままで見る駄菓子
弱点を握りチョコチョコ借りにゆき
なんべんも持ちかえて食うにぎりめし
握る手を無粋なベルが引き放し
俵せは握り返してくるデイト
本能がしっかと握る哺乳瓶
手を握り合うて楽しい時を持ち
小市民の怒りこぶしを握るだけ
最終レース車券を握る掌がふるえ
ボーナスを握らぬ先の皮算用
教習所ハンドルの握る手がふるえ
何か出る手品のようににぎりすし
退院車握りたい掌は近寄らず
お使いへ握った硬貨の子のぬくみ
凍てついた母の握ったにぎりめし
握り屋と云われてもよい金をため
握り屋の彼女つかわずつかわす
頂けぬ小唄へ撥を握らされ
パパの指握ってこわいものはなし
兼題「炎」 吉田圭井堂 選

恒明 清人 梅里 圭井堂 珠笑 貴山 柳太 多志 市郎 どんたく 李朋 滋雀 白溪子 主太 静波 一栄 金三 市郎 静波 滋雀 古方 与呂志 文秋 真砂 圭太 柳志 好郎 清人 柳宏子 舟遊 静馬

炎と燃えて結局は片思い
邪恋いま炎となって燃えさかり
かき立てた炎も燃えずとうに売け
教養が炎のように燃えぬ恋
炎見て火事は近いと大慌て
不景気が恋の炎へ水をかけ
情炎のとりこになった朝の悔い
乱れ髪恋の炎に打つ大鼓
密接の炎見つめて目がくらみ
燃えさかるわが家へ親子立ちつくす
夫の妬く炎も妻の恋心
清姫の恋に炎を見る舞台
知りつくも嫉妬の炎まなならず
不動様炎の中で涼しそう
女の情炎大の男を焼きつくし
炎のような激しさがあがり好々爺
私財没出た炎が会社建てなおし
ライターの炎へ生きた決意見せ
やきもちの炎しづめに気がつかれ
執念の炎を燃やす恋仇
昔話になってしまった恋の炎よ
炎なドトックに消えて中風病み
炎あかあか祈禱師涙顔になり
新入社誰かが炎のように燃え
年輪が炎の恋を冷やしけり
情炎空しく振り返ってもくれず
母性愛炎の中をかけめぐり
米寿なお炎のような事業欲
兼題「恩」 河相すずむ 選

恒明 梅里 よしを 文秋 誓二 梅里 多志 誓二 静馬 専翁 与呂志 一舟 野菜 あいき 柳宏子 史葉 市郎 一舟 恒明 よしを 白溪子 清人 野迷路 小松園 梅里 圭井堂 舟遊 トメ子 好郎 貴山 静馬

川柳初篇研究

バックナンバー

昭和四十年七月号まで
揃えております。

陸代三三六〇円

(著者小松園社負担)

川柳雑誌社サービス部へ

子供扱いされてうれしい恩師訪い
恩返しする気後輩指導する
恩に來て貸してそのまま忘れられ
効き目ないコネがしきりに恩にきせ
犬だけは恩を忘れぬエライやつ
恩少しあつて中元止められず
恩響を越えて花輪を届けさせ
恩典に浴した日から小さく住み
恩は恩忘れぬ頃に思い出し
恩返しするまで待つてくれず近き
未だ恩忘れず無心に來てくれる
口先で恩にきせてる電話口
あの時の恩は忘れぬ年賀状
恩返しお金で事を済ます吐
ずっしりとかぶさつてくる親の恩
恩は恩銭には裏い男にて
逆境の恩義くすさず五十年
ご恩は忘れず借金はそのまんま
報恩の行方山百合が匂う
報恩は子孫に残す御影石
バナナ黄色く甘しさまざまの恩
恩にきける膝を二度折って去に
いささかの報恩お通夜もよう動き
恩は恩イデオロギーの旗を振り

野菜 柳宏子 賀峰 珠笑 金三 賀峰 市郎 静馬 潮花 貴山 柳宏子 市郎 柳志 一栄 潮花 与呂志 双葉 多志 古方 市郎 潮風 薫風 好郎 多志

恩売るに慣れて政治家墮落する すすむ
 席題「育てる」 辻白漢子 選

お育ちがおんなの嘘を見破れず 静馬
 遺児五人抱えいばらの道を抜け 梅里
 自分独りで育ったように子は思い 柳宏子
 家風に合わぬと人の育てた娘に文句 一栄
 どんじりを走ってこれない子に育ち 清人
 育て方云わす学校が悪いに 静馬
 豪快に育てる嫁が気に入らず 賀峰
 犬の子を育てるように育てられ 小松園
 育てられる目ばかり産むと決め 清人
 一人子を育てる意見で親がもめ いさむ
 すくすくと育ちアバア追ひ出され 貴山
 猫の子を育てる趣味を姑もち 潮花
 喜びと苦は半半で子を育て 文秋
 二男の子神経質に育てられ 好郎
 初心者育てるだけの師匠なり 賀峰
 アキ伍におたまじやくし子が育て 柳太
 引き伸すように育てた子が叛き 多志
 丹精の菊より草の根が深し 珠笑
 育児法本読む娘を母笑い 金三
 養育費出せとはむい別れよう 貴山
 子沢山はやいてどなつて育て上げ 与呂志
 貰うてから家を継がせる子に育て 柳志
 宿題を親にせがまぬ子に育て 静馬
 子から手が離れて孫を持ち込まれ 梅里
 日教組権利を守る子に育て よしを
 人間路郎ボクをボクに育て上げ 古方
 親類へ育ち盛りを預けられ 貴山
 末っ子を育てる義理の母若し 一丹
 ほつとけば俺に似た子に育ち出し たつみ
 横綱を育てた小さい母となり 舟遊
 男手で育てて見せると負けていす 静波
 口答えされて嬉しい子の育ち 一米

働いて育てて母は氣をつかい あいき
 厳格に育ち異性の友が いず 白漢子
 川 阿倍野支部句会 (大阪府)

金井文秋報

折る人もない葉桜の枝が伸び 梅志
 見晴しもしつと立売り売るつもり 静馬
 展望台陸下も同様に方指し給い 栞
 どこからでも写せと虎は起きて来ず 柳志
 見晴しも名所古跡もない二人 梅里
 都塵吸う鼻山の空気を敏感に あいき
 良い景色は下から運びます 市郎
 古寺に口の達者な坊主いる 満潮
 雨やどり虎の縁起も聞く茶店 柳宏子
 商標や屋号で虎は親しまれ 金三
 見晴しが良すぎ足許からふるえ 滋雀
 葉桜になって静かな元の山 小松園
 はりばての虎たたかて首を振り 竹莊
 信心に序列があつた寄付の高 文秋
 張り子虎値の嵩む程恐く出来 句念坊
 葉桜の造幣局は毛虫とる 白柳
 俗化せにや保てぬ寺の台所 一丹
 試胆会古寺まではよう行かず 静歩
 見晴しはどうでもよろしいける口 八郎
 伝説を糧に古寺やと生き 又楽
 戒壇を出れば生きてる欲信じ 凡九郎
 地元では古寺いわれを知らず住み 綺史朗
 見晴しをうたい文句にした僻地 野菜
 見晴しは雲の中にも浮ぶ塔 喜仙
 葉桜へ三日見ぬ間の合言葉 野迷路
 川 維 玉造支部句会 (大阪府)

西出一栄報

調理場の今昼と云う換気扇 順三
 木の蔭をたしかめて吊るハンモック 千葉

好きな事させりや炎天嫌うてず 一丹
 そよ風に誘われて出る旅の宿 柳宏子
 風鈴が先ずそよ風を知らず音 文秋
 勉強は駄目コマシヤルはよく覚え あいき
 コマシヤル将を射んとて子を射止め 正彦
 お待ちどうなんてのんびり遅れて来 三時
 停年へののんびり出来ぬ世相なり 清子
 銀婚ののんびり湯宿で聞く河鹿 六竜子
 耳だけが動いてのんびり猫昼寝 良
 里がえり何はともかく寐るとる 風仙洞
 古典歌舞伎スローモーションめいた所作 白柳
 主人静か古典の書架に包まれて 章雅
 文楽で通訳しどもどろなり 静馬
 雛まつり子供に頃にかえる母 金三
 公約も違反も派手なのが通り 滋雀
 両隣り建築違反でにらみ合い 功
 落選の違反とことん洗われる 一栄
 運転手命拾いを叱りつけ 市郎

川 維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

真実は一枝一子のなぞをととき 句念坊
 枝肉をかみきる箸をそえている 一也
 竿竹にかして手頃な柿の枝 よしろ
 道が枝になつて三十三所の鈴 ゆきら
 割れたのでも一つ割つてガラスの終り 司郎
 新潟の雪の重さを知るガラス 幸男
 ガラスに盛られてからの芸術 白史
 ガラスの部屋で感情が消えてゆく 豊次
 すぐ脱いで売りますマネンの微笑 紫蘭
 即売の中で非売のすねたよう 親生
 止り木に産業スパイ火屋即売を 枯粒
 煮る湯気のかげろう貧しさは言わす 礫
 さんしよ煮る山の茶店の老夫婦 極堂

子供の取つて来たわびの一握煮る 鳥雀
 川 維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

弱点が何であらうと恋に生き 晩丹
 低姿勢まこと弱点あればこそ 同
 弱点を見られたくない空元気 内海
 弱点を衝かれて嬉し真の友 紅茶
 好きな人弱点までが美しい 美舟
 弱点に触れて気まずい夕餉なり 浮葉子
 弱点はそれだと亭主云つたきり 雪女
 弱点を衝かれへへと人食い 魔花魔
 弱点に触れ友情にひッが入り 蒼蛇棲
 弱点を洗いざらえて別れる気 同
 弱点をとられワイフへ低姿勢 あき坊
 弱点を握った妻はつよくなり カロ女
 秘書だけが社長の弱点知って居り 万里歩
 痛いところ衝かれて贈る袖の下 同
 横綱も弱点があり黒い星 拝山
 弱点を握り社長にせがむ秘書 快夢起
 弱点が新興宗教に迷い込み 紅溪
 弱点に触れて我が身を省みる 浅太

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町5 (361) 9373代
 支局 東京都千代田区神田鍛冶町2 (252) 4941代
 名古屋市中区村田町2 (88) 9069

更生はしても前科を持つ弱味 同
弱点は暫しむくれる好い女房 三石
弱点を庇ひ合つてゐる惚れた仲 柳葉

岡山県下川雜連合吟行大会

横山一声報

ふところがやめときなさいというダイヤ
主石へ女の見栄がからんでる 秋月
主石へ女は夢をくりかえし 伊久野
臨終の水へ主石よく光り かよ女
主石の形見贖とは知らず近き 照路
百万の宝石が売れストがあり 積恵
後世に遺る金剛石の歌詞 藤波
贖物でいいのあなたのくれた宝石 正州
宝石にふれない妻をいとしがり 久米雄
腕時計まで性格に似てとほけ 晴々
腕時計しびれ切らした告示板 鈴ん坊
うれしさはまたまきすぎた腕時計 宗義
腕時計の通りに国鉄着いてくれ 佐加恵
暴力のない山峡の深みどり 芳月
暴力をあやつるボスは紳士面 哲郎
割り込みを子供の瞳から突き出され 讓士
暴力のない街女市長です 方大
自惚れもなく地下足袋を今日も履き 胡風
高い鼻入試地獄でへし折られ 知水
自惚れが一万円札ばかり出し 水仙
お人好し知らない内に役がつき 柳風吏
一生を遠回りするお人好し 浄美
お人好しに見えて商魂たくましい 一声

大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平報

近火のショックで妻は産気づき 味平
衝激へ受話機かけるのを忘れ 酔羊
信じてたわが子の罪に母は嘆き 光郎

不合格のショックが肩を落して来 政代
倒産へ老舗の隠居ショック死し 魯木
フイアンセが社長の二号であつたは 久雄
だんく〜と縁で埋まる田植時 魯木
みどり葉を添えて若鮎匂うなり 味平
緑風に妻若々しハイキング 久雄
新緑にけちな内職いやになり 光郎
もち草の香りを指に染めて摘み 醉羊
子の命うばつた山の濃みどり 政代

木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

野球する約束留守をたのまれる 俊夫
留守番を夫に頼んで同窓会 芳子
栗桜の弁当かこむ家族づれ 孝華
自家用車目で合図する地位になり 一郎
留守番へわがもの顔にジャズが鳴り 加代
往診の患者留守らし五月晴 正夫
栗桜に満開しのぶ老夫婦 鶏生
栗桜となつて名所の客が絶え 昌
自家用車家族ぐるみの事故にあい 清泉
自家用車派手に動いて金詰まり 明朗

宇部支部句会 (宇部市)

安平次弘道報

回覧は昼寝の家へそと置き 素空
座布団がそのまま枕になる昼寝 信雪
里に来て昼寝なつかし古畳 わか子
保母さんの方が昼寝のしたい顔 実男
遠泳で生兵法が溺れかけ 南風
溺れた娘を助けてからの縁となり 鶏足
溺れたを助けてドラマ進行し 頼子
女ふと溺れてみたい夜があり 万年青
溺れたいムードへ理性が邪魔をする かつ子

溺れる弱味を邪教に丸められ 六花
金魚手に混んでるバスをあさめる いさ夢
貧乏神金魚のフンでつき廻り 百歩
金魚屋の音が意識をさせる初夏 きよ子
金魚売り間延びた声が夏を呼び 東村
受付がからむ酔いどれもてあまし 一考
受付のリボンで席を区別され 久子
受付に顔役揃えて寄付を待ち 利子
受付が社長と知らず呼び止める 章雅
受付で名刺と顔を比較され 羊蔵
夏休み喜ぶ子供にわくをはめ しげる
夏休み他人の子にも気を配り 博子
ボデーガード金魚のフンに例えられ 弘道

土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

テンペスト以来の愚痴も野菜の値 呑洋
値上りの中で内職据え置かれた たかし
値上りと別に今宵の祝いの酒 松竜
秀山を坪で売る気のブルドーザ 昌雄
値上りへ内風呂にする気が揃う 勝子
市場かご又値上りの立話 一步
値上りの庶民にひびくものばかり 桂緑
言訳の出来ぬクールのプレゼント 蟬蛇
結び癖字の癖母のプレゼント 伊津志
母さんによい成績をプレゼント 志加野
ささやかな心がこもるプレゼント 紅雨
捨てられてバーの勤めは伏せおき 勝喜
ホステスをしている娘に養なわれ 松風
ホステスの握り返した手の秘密 夢迎
姿見は二三度腰を映される 未遂
連休に入り寝不足の続く職 山里
三代を継ぐ商魂のよい紳名 天花
サンガラスかけて男としての意地 斐山

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック
積水化学
本社 大阪市北区岸見町1

雨上りズボンがかわき梯子酒 はる江
二号にはあらず頼りになる女 折翠
大鉄支部句会 (大阪市)
辻白溪子報

鯛干す空の高さを鳶が舞い 万の
京はよしお宮もお寺も庭があり 飛鳥
眼の底も明るくなって砂の条 求女
神光院ひっそり春の陽があまい たつみ
ほうき目に足あと残す朝詣で 美穂
つつじいま禅の境地に手入され 立夏
小半時比叡の色がもう変り 杜的
街発展加茂川の汚れ見て戻り 季賛
寂しさを庭が吸い込む正伝寺 永断
夕禪を河原に干して京の屋 宗悟
種子播いて子供をよせね柵が出来 白溪子
夕顔の種と袋に母の文字 水客

大阪通信病院川柳会（大阪市）

森下愛論報

道業も渉外事務の中に入れ 竹青
食道菜味覚の舌を自慢にし ハナ子
喰い道業よばれながらもそをほめ あやめ
新妻の手につき出しのくしの吉 愛論
土地の味つき出しに出て知る旅情 史葉
突き出しはつき出し出て知る旅情 史葉
この人は下戸か突出しばかり食べ 良夫
つき出しですまぬ客に気をつかい 草右
枕元チョロ／＼孫が寝よとせず 没食子
読めもせぬ本もつんどく枕元 宏子
枕もと大きな声して寝つかれず 勝利

南海電鉄川柳会（大阪市）

辻圭水報

幹事等の下見の膳は豪華版 句念坊
下見らし下見もせず判を押し 泉秋
下見やとしつかりサービスさせて去に 宏子
下見した頃は満開だった筈 和郎
下見とは名のみ麻雀ばかりして 圭水
背番号無い一軍の球ひろい 句念坊
一軍も二軍に負けずボロを出し 泉秋
一軍の素質があつて陽の目みず 和郎
ゴシップもさすが一軍派手であり 圭水

富柳会句会（富田林市）

阿部柳太報

もつともな顔で受売り聞いてやり 美代
受売りのうそをマダムは知つて居る 青米
受売りが尾鰭をつけてふれ歩き 清子
借金断り妻の知恵でゆき 好郎

海外出張まず結婚の予約をし 紅月
予約席だけが空いてるコマ歌舞伎 六龍子
大切な約束勝手にする若さ 一栄
さわつたらあかんと云うて見せてくれ 花梢
大切に育てて番犬の役をせず 吸江
大切な志が抜けてるよな政治 白柳
投票所未だきめかねる全国区 美房
この一票汚職をするとならず入れ 柳太
世話やきのとこまで母に似た娘 すみれ
野良仕事親子倅せそうな汗 八重子
緑日て親子の乞食よく稼ぎ 静林庵
お世話なら嬉んでしまふ惚れた仲 摩天郎

山内静水報

たけはら川柳句会（竹原市）

顔借してその上記びる破目となり 紀世美
倅せを語めるに絵葉書小さすぎ 菁居
またこれも夫の好みと歩調合い そのみ
若草に寝転び初夏の陽を浴びる 季武
雨に惜し切るにも惜しいバスの色 房枝
倅な仔大茶の間まで抱かれ 正
学歴も花嫁道具のなかに入れ 美代子
頼りない奴へ頼りに行く落目 卓三
針金をとつてと言えぬ鉢の松 凡女
すれ違ふ向うのバスも超満員 鬼焼
子と鳴らす豆笛オカッパの日に返り 澄恵
公約は選挙が済めば御用済み 一路
興奮が出させた手紙へ残る悔 操子
言ひ訳の効かぬ相手とみて黙る 春男
子のいない夫婦に仔犬もらわれる ひさし
百姓はやめると美田へ建つ工場 政己
テスト終え勇躍帰る子を迎え 潭月
びしよ濡の中で自分をほめてやり 俊勝
母ちゃんに内緒仔犬を抱いて寝る 房子
趣味多忙お花はバケツにつけたまま 静水

コクヨ川柳会（大阪市）

川口理休報

臨月であわれ価値なき夫なり 理休
ぶざまとも云えず臨月の伴をして はたる
臨月を特売場でわすれてい はたる
筆マメへ電報のような返事やり ルミ
無事であれただそれだけと親と子よ 八苦
筆まめに出してとうとうゴールデン 同彦
筆まめのなれた手紙でいやになり 同彦
寝相にも羨のよさがうかがわれ 同彦
実家に来て軽いイビキの昼寝なり ルミ
娘も寝相気になる程に成長し 理休
遺言に寝相のことも注意され 留鈍
すみっこで子等と寝ている愛妻家 武
寝相などどうでもいいわと嫁かん気か 昭一

あすなる川柳句会（大阪市）

山本素郎報

三味線で踊るパパとはつゆ知らず 慶之助
騙された方も悪いと言ひ聞かせ 福郎
弱り目に祟り目家相気にしだし 万里
定年にBGまでが生返事よしを 幸児
子の声も落目の父に冷たかり 幸児
落目とみたかキャッシュで切り出され ゆきを
彼の手を借りて素足になる渚 素郎

城北明老句会（大阪市）

田中多幸報

ぼんぼんが親のレベルでそりかえり 喜久
返済の金を競馬ですって来る 源川
返済に追われて暮す月賦好き 繁子
返済し帰りの下駄の軽いこと 政夫
返済で両方円満笑い顔 久江
返済は正しく誠意ののしを付け 多幸
良縁の話もレベル気にかゝり 芳
返済に追われてバートタイムに出 濁水
返済をして晩酌の味の良さ 一登
返済に追われても妻見えを張り 清江
降る朝になって思い出す忘れ傘 富士
初孫も病院にてはピンとこず 久子
宝くじ当てて返済するつもり 生仏
ラッパだけ吹いて返済せぬ社長 充弘
返済法セールスマンにおしえられ 弘生

大萬

梅里ノ店

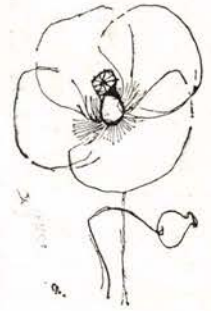
料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL(三三)三九三五番
(三三)七七八二番
アベノ橋近地下食通街
TEL(三三)〇一四七番
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL(三三)九一八四番

串の店

TEL(三三)〇一四七番
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL(三三)九一八四番

宴会・出張パーティ・折詰弁当

柳樽室



★ロングランであった路郎の川柳生活は行年七十八才で終止符をうった。川柳職業人を宣言してから路郎の生活は決して生きんがための生活ではなかった。川柳の社会的進出とその質的向上に全力を傾倒し、日本内地の識者を訪うて、従来のあやまれる川柳観をただして廻り、北支豪彊にまで其足を伸して目的を遂行した。路郎は又自分の主義主張は頑として曲げなかった。私はだまって、両手を膝へ置いて路郎の動向を傍観していたにすぎ

九月例会予告

兼題
● 宣伝
● 歩行者
● 造花

なかった。消極的な意味での妨害者であったであろうが補佐役としては何の役にもたなかった私であった。然し路郎は決してそれを悔いてはいなかった。私というものを最もよく知っていた路郎は仕方がないと諦めていたのだと思っている。半世紀以上に亘る路郎の生涯は紆余曲折、実にいばらの道ではあったが、何事も自分の意志通りに断行し得られただけは幸福な人であつたと思う。路郎は川柳の外には何も考えていなかった。枕辺につきそっていた息子、娘等も、何か大切なことを言い残しはしないかと耳をすましていたそうだが、時々口から洩れる謔言は講演のきれっぱしのようなものでありであった。「川柳

雑誌」は一応廢刊はしても、あとに続く門下生には厳しい指導を受けた松坂俱樂部川柳講座出身の方々もあり、路郎出席の阪大川柳会、通信病院川柳会、南海電鉄川柳会、その他創刊当時から支部の面々もおられるので、「川柳雑誌」三世のありかたを大いに属目している次第である。路郎は又、川柳ひとすじで活躍して来たのだが、他の詩型にもそれ／＼の特徴をよく理解していた。従って歌人、俳人、詩人のベテランにも交友があった。関西短詩文学連盟の設立に尽力し、毎年各部門で文化祭を開催し、作品展を開くなど、労働の奉仕は常にオーバーワークであつた事に気付かなかつたのであつた。若し、路郎の魂此世にとどまることあれば今後の柳界のことであろうと思つてゐる。

★路郎の病状が急に悪化したから編集部の仕事は外部、内部ともにビッタリと活動が停止した。十八日の本



ハンディな生ビール

アサヒ
スタイナー

大 65円

葬がすんでからも雑誌の組み込みが出来てないうと云うのでは、一ヶ月からも遅刊する事になるので、編集部は昼夜兼行で八月号のまとめをつけた。欲しい原稿もスペースの関係で掲載出来ず、不手際の点は幾重にも御容赦願

★謹んで麻生路郎主幹に、哀悼の意を表します。★七月十日の誕生日を待たず七夕の夜主幹は惜しくも他界せられたのです。誕生日の祝詞を前に川柳ゆかたで、うれしそうに盃を挙げられるお姿はもう永久にみることは出来ない淋し限りです。★主幹の川柳への情熱は一川柳雑誌社のものではなく、世界の川柳には進んで出席され各国の文化人と交り、川柳を談じ翻訳も依頼されておられ公私ともに多くの仕事を残して逝かれました。★橋高薫風、麻生路郎序「れもん」が、七月末新刊発行されました。主幹は後記へ発行に際し一言僕の言葉も書いてほしい由、お聞きしておりましたが、その言葉を聞かずして、逝かれたのは、著者とともにかえすがえすも残念なことです。「れもん」発行に当り、柳縁の深淺をとわずみなさまに吹聴ご支援の程をお願い申し上げます。(安子)

★那谷光郎氏 鳴尾公民館、☆宇部句会・8日(日)一時、題、西瓜・ソーメン・ゆうれい・キャン・所、宇部市東区恩田長沢三津秋六花居、☆京都句会・20日(金)夕、題、駁す・鳩・操言、所、上京区相国寺北門前町上ノ町妙庵、☆南海電鉄句会・19日(木)六時、題、海・精神力・セールス、所、難波高架下親和クラブ、☆阿倍野句会・20日(金)六時、題、艶・臨時・崩す・ギャラ、所、市バス阿倍野第八丁目東百米菊沢小松園居。

「川柳雑誌」廢刊後

は皆様の作品の発表誌として柳誌「川柳塔」が新らしく生れます。

詳細は次号で発表します。

事務所は

大阪市南区饅谷仲之町二十

中島小児科診療院内

川柳塔社

所、阪神鳴尾駅東口一百米

だるい? 疲れる?

ハッパイビタ®

疲労・神経痛・便秘・夜尿症に!

♣5ミリ錠・25ミリ錠・50ミリ錠・100ミリ錠



フジサワ

川柳

詩川柳考

高鷲亜鈍著

B9型兩入

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であつたがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した。今は柳会にあって庶民の詩人的自覚を促す。ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る。凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書。

東野大八著

風流 人間横丁

B6型二五八頁

★異常な戦争にまきこまれ隻手となつて、たじた著者のザックバラな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄しい。まるで腕の冴えた板前の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

浜田久米雄著 麻生路郎序

川柳句集



定価300円
送費 50円

★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山産。多年不朽洞会員として又国鉄川柳人として古豪の名をほしいままにしている。三十余年の柳歴を飾る数千句中より百句を自選し、各句に感想を附して世に問うもの。

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

価380円
送費90円

価250円
送費70円

発行所 大阪市住吉局区内
万代西五丁目25

川柳雑誌社

振替口座 大阪 75050
電話 大阪 朝 6081

Printed in Japan

社告

七月七日路郎主幹死去に伴い、永らくご愛読頂きました「川柳雑誌」は九月(路郎追悼号)を以て一応發刊の運びとなりました。従つて「一路集」「近作柳樹」「川柳塔」「方円帖」等、又は評論、研究、其他雑文の募集も本号を以て打ち切る事に致します。

大正十三年創刊より四百六十号の長い間ご愛顧頂き有難うございました。又この欄で毎号募集いたしました総ての課題吟、雑誌、文章を寄稿下さった諸家、読者、或は選句の労を担つて下さった先生方に厚く感謝の意を表します。

尚購読料は、追悼号發刊の後、追つて精算させて頂きます。

川柳雑誌社

B列5号 毎月一回一日發行
川柳雑誌 四十年
第八号

定価 一〇〇円
(送料六円)

(禁転載)

昭和四十年七月廿五日印刷
昭和四十年八月一日發行

大阪住吉局区内万代西五丁目二五番地

編集兼發行所 麻生 幸二郎

大阪住吉局区内万代西五丁目二五番地

發行所 川柳雑誌社

電話 大阪(671)六〇八一
振替口座 大阪七五〇五〇番

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和四十年八月一日発行 (毎月一日一回発行)
編集 兼 発行 印刷人 麻生幸二郎 発行所

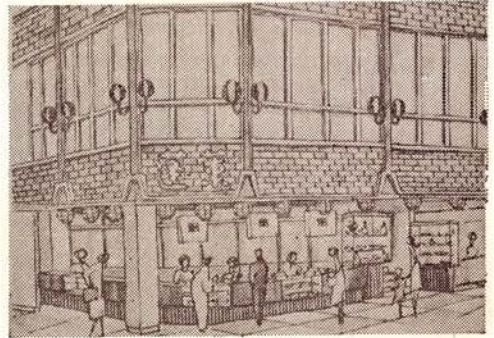


国立公園 奥新和歌浦・雑賀崎
風光明媚な海岸美を誇る
国際観光旅館

うおまた
魚又楼

TEL 和歌山 ④ 0431・1186

豚饅・焼売



広東料理

蓬萊

大阪 なんば

TEL (641) 0551~2

高島屋店・そごう店・天満京阪ストアード

(毎日新聞評)
麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十余年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとした

川柳の味わい方・五百数十句

竹川路郎著

麻生路郎著

好評噴々

ものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

発行所 川柳雑誌社

電話大阪(671)六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地



大和文華館

日本建築の特色に近代美をいかした建物で絵画・彫刻・書蹟・陶磁漆工・染織など 国宝や重要文化財をふくむ逸品を集めた すばらしい美術館です

春秋には 特別展観が開かれます
近鉄上本町から奈良ゆき急行28分
京都から奈良ゆき特急30分 西大寺駅のりかえ5分 学園前駅すぐ

振替口座大阪七五〇五〇番 定価百二十円(送料六円)